

「貨幣資本の蓄積」(『資本論』第3部第26章)の草稿について : 第3部第1稿の第5章から

OTANI, Teinosuke / 大谷, 禎之介

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

経済志林 / The Hosei University Economic Review

(巻 / Volume)

57

(号 / Number)

4

(開始ページ / Start Page)

133

(終了ページ / End Page)

196

(発行年 / Year)

1990-02-20

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00008506>

KEIZAI-SHIRIN (The Hosei University Economic Review)
 Hosei University, Tokyo, Japan
 Vol. 57, No. 4, 1990

「貨幣資本の蓄積」(『資本論』 第3部第26章)の草稿について

——第3部第1稿の第5章から——

大谷 禎之介

1. はじめに

『資本論』第3部のエンゲルス版(現行版)第5篇第26章「貨幣資本の蓄積。それが利子率に及ぼす影響」は、マルクスの第3部用の草稿のうちの「第1稿」すなわちいわゆる「主要原稿」の321—325 b ページからまとめられたものである。草稿ではこの部分は、「第5章 利子と企業利得(産業利潤または商業利潤)への利潤の分裂。利子生み資本。」に含まれる6つの項目のうちの第5の項目「5) 信用。架空資本。」のなかの、エンゲルス版で「第25章 信用と架空資本」に用いられた部分に続く箇所である。

草稿のこの321—325 b ページのうち、321ページから322ページの1行目までは、すでに拙稿「「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(中)」(『経済志林』第51巻第3号、1983年)のなかで、草稿の第25章部分とあわせて紹介した。今回本稿で取り扱うのは、それに続く、ノーマンおよびオウヴァストン批判の部分である。本稿の表題を「「貨幣資本の蓄積」(『資本論』第3部第26章)の草稿について」としたのは、このノーマンおよびオウヴァストン批判の部分が第26章のなかで圧倒的なページ数を占めており、また、草稿の第3部第5篇を取り扱ったこれまでの拙稿がすべてエンゲルス版の章にそくした表題をつけてきていることから、

それにならったものであるが、後述のように、エンゲルス版の表題はこの部分の内容を表わすものとはなっていない。

エンゲルス版の第26章のこの部分のテキストは、すでに見た第21—24章の場合と同じく、草稿のテキストとほぼ一致している。第26章の編集作業については、エンゲルスの第3部への「序文」では、「第25章と第26章では、引用資料のふるい分けや他の箇所で見いだされた材料の挿入が必要だった」（*MEW*, Bd. 25, S. 13）、と記されているだけであるが、本稿で取り扱う部分では、草稿のこの部分のなかに見いだされる「イングランド銀行の割引率。地金。銀行券。」という一つの表が省かれているほかは、ほぼ草稿がそのまま第26章のテキストとされている。ここでのエンゲルスの作業の大半は、それまで彼が第3部の草稿の整理をするのにとってきたしかたで個々の文章を手入れすることと、草稿での注や追記を印刷用に整理・配置することとであった。

本稿では、第3部第1稿についてのこれまでの拙稿と同様のしかたで¹⁾、エンゲルス版第26章中の該当部分にあたる草稿を調べ、それとエンゲルス版との相違を示すが、そのまえに、エンゲルスによるこの章の編集が含む問題点とその帰結について簡単に述べておくことにする。

なお、一連の拙稿による第3部第5篇の草稿の考証的研究は、本稿をもって、その第一段階を終えることになった。すなわち、エンゲルス版での第21章から第24章までの、利子生み資本そのものを純粋に論じた部分と、第25章の信用制度概説と第27章の信用制度の必然性・役割にかんする部分、そしてその中間に挟まれている第26章のノーマンおよびオウヴァストンの批判の挿論、以上第21—27章に利用された草稿部分（草稿 286—327 ページ）についての検討がすべて終了したわけである。もちろん、それを前提とした内容的な検討・研究はまだ緒についたばかりである。しかし、第3部第5篇草稿の考証的研究としては、やっと本来の貨幣資本〔*monied capital*〕論（すなわちエンゲルス版第28—35章相当部分）に取りかかるところに達したところである。これまでの第21—27章部分についての内容

的な研究も引き続き進めるつもりではあるが、ともかくも、準備がととのいしだい、読者の要望が大きい、考証的研究のこの第二段階に進むことにしたい。

- 1) 以下のものを参照されたい。① 「貨幣取扱資本」（『資本論』第3部第19章）の草稿について、『経済志林』第50巻第3・4号、1983年。② 「信用と架空資本」（『資本論』第3部第25章）の草稿について(4)、『経済志林』第51巻第3号、1983年。③ 「資本主義的生産における信用の役割」（『資本論』第3部第27章）の草稿について、『経済志林』第52巻第3・4号、1985年。④ 「利子生み資本」（『資本論』第3部第21章）の草稿について、『経済志林』第56巻第3号、1988年。⑤ 「利潤の分割」（『資本論』第3部第22章）の草稿について、『経済志林』第56巻第4号、1989年。⑥ 「利子と企業者利得」（『資本論』第3部第23章）の草稿について、『経済志林』第57巻第1号、1989年。⑦ 「資本関係の外面化」（『資本論』第3部第24章）の草稿について、『経済志林』第57巻第2号、1989年。

2. 第26章の編集におけるエンゲルスの誤りについて

草稿の「5) 信用。架空資本。」のなかには、はっきりした区分とそれへの表題がほとんどないので、エンゲルスはこの部分を自分の判断で11の章（第25—35章）に分け、表題をつけた。この作業は困難をきわめたものであったと想像されるが、彼の努力にもかかわらず、その区分と表題とに大きな問題を残したところがいくつか見受けられる。そのうちの一つがこの第26章の区分と表題である。この点については、すでに、拙稿「信用と架空資本」（『資本論』第3部第25章）の草稿について(上)」（『経済志林』第51巻第2号、1983年）で述べたが、その要点は、ここでも記しておかなければならないであろう。

エンゲルスが第26章を作るときに犯したと考えられる過誤は、大きく言って、二つある。

第1に、彼はこの章に「貨幣資本の蓄積。それが利子率に及ぼす影響」という表題をつけたが、この表題がこの章全体の内容を表わすものとして適切かどうかという問題がある。草稿でも、エンゲルスによって第26章冒

頭に置かれた『通貨理論論評』からの引用の前に、「貨幣資本の蓄積とそれが利子率に及ぼす影響」という見出しがあり、エンゲルスがこれを取って第26章の表題としたことは疑いない。しかし、草稿ではこの見出しは明らかに、この『通貨理論論評』からの引用と、それに続くハッパードからの引用とからなる、きわめてわずかの部分（現行版でほぼ1ページ）につけられた小見出しにすぎないものである。そこで、このことをエンゲルスは知りながら、なおかつ彼が第26章とした部分全体への表題としてこの表題がふさわしいと考え、あえてこれを選んだのか、それとも、これがマルクスによって第26章部分全体への表題として書かれたものと勘違いしたのか、ということが問題になる。これは、エンゲルス版で第26章とされている部分の草稿の内容から判断されなければならないことであるが、筆者の見るところ、エンゲルスのこの処理は、ほとんど確実にエンゲルスの勘違いにもとづいて行なわれたものである。第1に、草稿では、いま述べた『通貨理論論評』およびハッパードからの引用の部分は、それ以前の318ページから始まり、それ以後322ページ1行目まで続くいわば雑録のなかにあるのであって、拙稿「信用と架空資本」（『資本論』第3部第25章）の草稿について（中）で紹介したこの雑録の内容を検討されれば了解されるであろうように、この雑録部分を『通貨理論論評』の引用のところで二つに分ける内容的な必然性はまったくない。第2に、エンゲルス版での第26章は、「貨幣資本の蓄積とそれが利子率に及ぼす影響」という見出しがつけられた『通貨理論論評』およびハッパードからの引用の部分を除くと、それに続く雑録の引用の残りとして、ノーマンおよびオウヴァストンの批判の部分とからなっているわけであるが、この二つの部分に「貨幣資本の蓄積。それが利子率に及ぼす影響」という表題をつけるのは、きわめて一面的であって、それらの内容を表わしてはいないと言わざるをえない。それらがこの表題の示す問題を主題的に扱っているとはとうてい考えられない。この2点から見て、エンゲルスは小部分への小見出しを第26章部分全体につけられた表題だと勘違いしたのだと、筆者は推定するのである。

第2に、エンゲルスは、いま述べたように、第25章部分に付随する雑録からの一部分とノーマンおよびオウヴァストンの批判の部分とから第26章を作ったのであるが、これによって、この両者の部分が、第25章部分と第27章部分とのあいだに、それらと対等のウェイトをもつものとして位置するかたちになっている。ところが、草稿では、この兩部分は、かなりはつきりと第25章の本文の部分(雑録を除く部分)および第27章の部分から区別できるように書かれているのであって、エンゲルスがもしそのことに気づいていたならば、この部分の取扱いは現行のものとは異なったものにするべきところだったと思われるのである。第1に、前半の(といってもページ数から言えば、ごくわずかの)部分は雑録部分であり、しかも、もしそれをどこかに収録するとすれば、第25章の本文の部分のあとにつけられるべきものである。第2に、ノーマンおよびオウヴァストン批判の部分は、草稿では、明らかに、本文のテキストとして書かれた部分とは違った書きかたが行なわれている。マルクスは一般に、本文のテキストを書くときには——草稿性が高い場合でも——、ノートを半分に折って、その上半部にテキストを書き、下半部にそれへの注や追記などを書くようにしており、この第5章の場合にも基本的にはそのようなノートの使い方を行っている。ところが、そのようなノートのなかでも、のちに使用する材料として抜萃を行なっている部分は、上半部と下半部との区別なく、ページ全体を上端から下端までいっばいに使って書いている。そこで、そのような使い方が行なわれている部分は、逆に、そこは本文のテキストとして書かれたのではない、という推定を許すのである。ノーマンおよびオウヴァストン批判の部分は、まさにそのような書き方がなされている部分である。現行版でもこの部分にはマルクス自身がつけた脚注が皆無である。だから、この部分は、第25章の本文部分および第27章部分と対等のかたちで、それらのあいだに置かれるべきものではない。第25章のあとには第27章が続く、ということが、その構成から読み取れるように編集すべきところなのである。(エンゲルスがこのような大事な点を見落としたのはなぜか、ということにつ

いては、前記拙稿で筆者の推測を述べている。)

このようなエンゲルスの編集上の誤りは、たんにこの部分では草稿が忠実に再現されていないという局部的な問題にとどまらない重大な結果をもたらしている。というのも、このような第26章の表題と内容と位置とが、第5篇の第25章以降の展開の筋道をきわめてわかりにくいものにし、その結果、このような構成についてのきわめてさまざまな解釈を生み出しながら、いずれも説得的とはいいがたいものとしてきているからである。

しかし、いったん第25章のうちの、その冒頭から、「特殊な信用諸機関ならびに銀行の特殊な諸形態は、われわれの目的のためにはこれ以上考察する必要はない」(MEW, Bd. 25, S. 417)と書かれているところまでを、本文のテキストとして書かれているところと見、それに続く本文は第27章部分であると見るならば、この二つの部分が、これに続く「5) 信用。架空資本。」の残りの部分(エンゲルス版第28—35章)にたいする総論ないし序論であることがはっきりと見えてくる。このような視点から、筆者は、「5) 信用。架空資本。」の全体を信用制度下の利子生み資本(monied capital)の諸姿態の分析であると考え、そして第25章および第27章をこの分析の序論としての信用制度の予備的分析ないし説明と考えているのであるが、この点については別稿で述べているので、ここでは省略する。¹⁾

本稿では、草稿のエンゲルス版第26章相当部分のうち、すでに紹介した第25章への雑録部分に含まれるトゥックからの引用までの部分を除き、それに続くノーマンおよびオウヴァストン批判の部分を紹介するのであるが、以上の見地から言えば、これは内容的には草稿の「5) 信用。架空資本。」の序論部分に含まれる挿論部分の紹介ということになるわけである。

なお、本稿で紹介する、第26章のうちのノーマンおよびオウヴァストン批判の部分の内容は、言うまでもなく、第28章および第33章とともに、第5篇のなかでいわゆる「貨幣の前貸と資本の前貸」あるいは「流通手段の前貸と資本の前貸」の問題が、そのような問題として論じられているところと考えられている箇所である。この問題は、草稿によって見ると、エンゲ

ルス版で見られるのとはかなり異なった筋道が見えてくるようにも思われるのであるが、それは、草稿の第28章部分の紹介を終えたのちに論じることにして、ここでは立ち入らないことにする。

- 1) この問題については、「信用と架空資本」（『資本論』第3部第25章）の草稿について⁽¹⁾、『経済志林』第51巻第2号、1983年、で論点を指摘したのち、
① 「『経済学批判』体系プランと信用論」（所収、『資本論体系』6、「利子・信用」、有斐閣、1985年）、
② 「資本主義的生産における信用の役割」（『資本論』第3部第27章）の草稿について、『経済志林』第52巻第3・4号、1985年、
③ 『資本論』における信用の役割、『信用理論研究』第3号、1986年、
④ 「利子生み資本」（『資本論』第3部第21章）の草稿について、『経済志林』第56巻第3号、1988年、の諸拙稿で拙見を述べた。これらを書いていくあいだに拙見は次第に明確になってきたのであって、最後のものにかかれてるのが筆者の現在の見解である。

3. 第26章の草稿、それとエンゲルス版との相違

本節では、第3部第26章に用いられたマルクスの草稿を見る。これまでと同様に、草稿からの訳文をかかげ、それに、エンゲルス版（MEW版、また必要に応じて、エンゲルス自身の手にかかる唯一の版である1894年のマイスナー版——「1894年版」と略称する——）における手入れを注記する。注記する手入れ（相違）の範囲や用いる記号類は、これまでのものと同じである。なお訳文には、岡崎次郎氏の訳（大月書店刊の諸版）を土台として使わせていただいたが、ほとんどそのままとなっているところもあれば（たとえば、エンゲルスによる長大な注については、岡崎訳に手を入れる必要をほとんど感じなかった）、大きく手を加えたところもある。いずれにせよ訳文は、エンゲルス版との相違を示す必要に大きく制約されていることをご理解いただきたい。

草稿そのものの取り扱いおよびそれへの注記にかんする約束事は、次のとおりである。

注記のさいに、エンゲルス版とは異なる、草稿でのマルクスの原文をなるべく示すことを原則とする。エンゲルスの手入れは、訳文でも変更が生

じるものばかりでなく、同じ意味の別の単語で置き換えた場合、文章構造の変更、括弧類の変更、なども注記する。しかし、次のようなものは煩瑣になるだけだと思われるので、原則として取らないことにする。——正書法上の変更、語順の局部的な変更、人称変化・格変化の訂正、定冠詞の削除・挿入、前置詞などの文体上の反復挿入、同じ動作名詞の -ung 形と -en 形との交換、意味にほとんど変更をもたらさない句読点の変更、語句の局部的変更、等々。

行の上などに書き込まれていることによって、あとから（といっても直後かもしれないのであるが）書き込まれたことがわかる語句は《 》で示す。

{ } は、マルクスによる角括弧，[] は筆者の挿入である。下線による強調は、とくに注記しないかぎり、すべてマルクスの草稿における、1本の下線による強調である。エンゲルス版では、この強調は原則として省かれた。エンゲルス版で強調されている部分（1894年版では隔字体、MEW版ではイタリック体）は、そのつど、注記する。

マルクス自身の注は、筆者の注と区別できるようにするため、その注番号をゴシック体にし、またそのままに「[原注]」と記す。

草稿ページは次の記号で示す。ここでの数字および語句はもちろん例示のためのものである。

|326| Es... ここから 326 ページが始まる。

/326/ Es... ここから 326 ページの中途のある部分が始まる。

...so| ここまでのページが終わる。

...so/ ページの途中でいったん切れることを示す。つまり、このページにはさらに別のなんらかの記述があることを示す。

ページの変わり目が文の中途である場合には、あとのページの最初の語の直前をその変わり目とみなす。

注のなかでは、草稿とエンゲルス版との相違は、草稿訳文の該当部分をまず掲げ、次にそれがエンゲルス版でどのようになっているかを記す、と

いうしかたで示す。すなわち、「A→B」は、草稿中のAがエンゲルス版ではBに変えられていることを示し、「A——削除」は、草稿中のAがエンゲルス版では削除されていることを、「挿入——A」は、エンゲルス版ではここにAが挿入されていることを示す。意味の変化をもたらさない語句の変更（外国語のドイツ語への変更，文体上の統一や改善——とエンゲルスには思われたもの——のための変更，等々）については，誤解が生じないかぎり，訳文中の訳語の直後に原語を〔 〕に入れて示した（このような場合でなくても，原語を示したほうがいいと判断した場合には，それを〔 〕に入れて示している）。場合によっては，注のなかで，訳語を掲げたあとに，原語で「A→B」とする仕方で示した。これらの変更の記載は，煩瑣をさけるために，網羅的ではなく適宜取捨選択してある。

なお，「貨幣資本」ないし「貨幣資本家」の原語が *monied capital* ないし *monied capitalist* である場合には，必ずそれを〔 〕に入れて示しているので，この語がない場合には，原語は *Geldcapital* ないし *Geldcapitalist* となっているわけである。

/322/ ¹⁾第3635号。「あなた〔 〕」（つまり頼馬のノーマン（《イングラ
 ンド》銀行理事）²⁾〔 〕は、利子率は銀行券の量によって決まるのではな
 くて、資本の需要供給によって決まるというお考えだと述べられました。
 あなたは「³⁾資本」³⁾のうちに、銀行券と鑄貨⁴⁾のほか、なにを含められる
 のか、お述べくださいませか？——「⁵⁾資本」⁵⁾の普通の定義は、生産で
 使用される商品またはサービスだと思えます。〔 〕第3636号。「利子率に
 ついて語られるとき、⁶⁾資本⁶⁾という語のなかにすべての商品を含めら
 れるということですか？——生産に使用されるすべての商品を含めます。
 〔 〕第3637号。「利子率について語られるとき、あなたは⁷⁾資本⁷⁾と
 いう語のうちにそのすべてを含められるのですね？——そうです。かりに、
 ある木綿製造業者が自分の工場のために綿花を必要とするとすれば、彼が
 その綿花を手に入れることにとりかかるときの方法は、おそらく、自分の
 取引銀行業者から前貸を受け、こうして手に入れた銀行券を持ってリヴァ
 プールに行き、買入れを行なう、ということでしょう。彼が現実に必要なと
 するのは綿花です。彼は、綿花を手に入れるための手段としてよりほかに
 は、銀行券や金を必要としません。あるいはまた、彼は自分の労働者に支
 払うための手段を必要とするでしょう⁸⁾。そこで彼は再び銀行券を借り入
 れ、この銀行券で⁹⁾労働者の賃銀を支払います。労働者のほうではまた食
 料や住居が必要であり、この貨幣はそれらの代価を支払う手段です。」第
 3638号。「しかし、貨幣には利子が支払われるでしょう？——たしかに一
 応はそうです。しかし別の場合をとってみてください。彼が、前貸を求め
 て銀行に行くことはせず、綿花を信用で買うと仮定しましょう。その場合
 には、現金価格〔the ready-money price〕と支払日における信用価格
 〔the credit price〕との差額が利子の尺度〔measure〕です。かりに貨
 幣が全然ないとしても、利子は存在するでしょう。」（銀行法委員会。前出。
 1857年。）¹⁰⁾

1) 挿入——「今度はすでに前にも引用したもう1つの議会報告書『銀行法特別

委員会報告書、下院から上院に送致、1857年』(以下では、『銀行委員会』1857年、として引用する)をとってみよう。そのなかでは、イングランド銀行の理事で通貨主義者たちのあいだの一大光明であるノーマン氏が次のように尋問されている。」なお、同証言からの以下の引用で、マルクスは引用符を、あるときは証言番号のまえに、あるときは証言番号のあとに置いている。エンゲルスは1894年版で、証言番号のまえに置く仕方に統一した。現行版(MEW版)では、証言番号のあとに置くように統一している。ここでは、草稿のままとするが、それとエンゲルス版ないし現行版との相違はいちいち注記しない。また、現行版(MEW版)では、1894年版で改行となっていない場合にも、原則として引用の前後を改行にしているが、この原則によって生じている、草稿での改行と現行版との改行の相違も注記しない。

- 2) 「(つまり頼馬 [Esel] のノーマン (《イングランド》銀行理事))——削除。
- 3) 「「」および「」——削除。
- 4) 「铸貨 [coin]」→「硬貨」
- 5) 「「」および「」——削除。
- 6) 「「」および「」——削除。
- 7) 「「」および「」——削除。
- 8) 「でしょう」——削除。
- 9) 挿入——「彼の」
- 10) 「(銀行法委員会。前出。1857年。)」——削除。

この高慢ちきな無駄ばなし¹⁾は、この通貨主義の中心人物²⁾にまったくふさわしいものである！ まずはじめに³⁾、銀行券や金^{きん}はなにかを買うための手段だという〔その数のことは彼は忘れている〕⁴⁾、そして、人々が銀行券や金^{きん}を借りるのはそれら自体のためではない？ という、天才的な発見。そしてそこから、利子率が規制されるということが、なにによって規制されるのかということが、出てくるのだと言う。つまり商品の需要供給によって。といっても、それについてこれまでにわれわれにわかったことは、ただ、需要供給は商品の《市場》価格を規制するということだけである。しかし⁵⁾市場価格は同じでも⁶⁾、まったく違ったさまざまな利子率がそれと両立する。そこで、そのさきでのずるい言いぐさを見てみよう⁷⁾。「しかし、貨幣には利子が支払われるでしょう？」——この言葉はもちろ

ん、商品をまったく取引しない銀行業者が受け取る利子は、これらの商品とどんな関係があるのか、また、まったく違った諸市場で、つまり「生産に使われる商品」の「需要供給」がまったく違っている諸市場⁸⁾で、その貸付を⁹⁾投下する製造業者たちも、同じ利子率で貨幣を手に入れるではないか、という問いを含んでいる——という正しい発言にたいして、このもったいぶった頓馬¹⁰⁾は、製造業者が綿花を信用で買うのなら、「その場合には、現金価格 [the ready-money price] と支払日における信用価格 [the credit price] との差額が利子の尺度である」と言う。逆である。わが友¹¹⁾ノーマンがその規制を説明しなければならない現行¹²⁾利子率こそが「¹³⁾現金価格と支払日における信用価格との差額の尺度」¹³⁾なのである。まず第1に、綿花はその現金価格で売られなければならないのであって、この現金価格は市場価格によって規定されており、市場価格そのものはまた需要供給の状態によって規制されている。その価格が、たとえば1000ポンドだとしよう。売買に関するかぎりでは¹⁴⁾、製造業者と綿花仲買人との取引はこれで片づいている。次に第2の取引が加わってくる。こんどは取引は貸し手と借り手とのあいだのそれになる¹⁵⁾。1000ポンドという価値が製造業者に綿花のかたちで [in cotton] 前貸されるのであって、彼はそれを、たとえば3か月のうちに貨幣で返済しなければならない。あたかも彼が1000ポンドを3か月間前貸したかのように計算される。¹⁶⁾そこで、利子の市場率にならって¹⁷⁾規定されている1000ポンドにたいする3か月分の利子が、現金価格につけ加えられる上積み分になる。《綿花の》価格は需要供給によって規定されている。しかし、綿花の価値つまり1000ポンドの3か月間の貸付¹⁸⁾は利子率によって規定されている。そして、このように綿花そのものが貨幣資本 [moneyed capital] に転化させられるという、このことが、ノーマン氏にとっては、「¹⁹⁾かりに貨幣が全然ないとしても、利子は存在するでしょう」¹⁹⁾、ということを証明するのである。もし貨幣 [money] が全然ないとすれば、どのみち一般的利子率 [general rate of interest] はないであろう。

- 1) 「無駄ばなし」 Seichbeutelei→Kohl
- 2) 「中心人物」 pillar→Stützpfiler
- 3) 「まずはじめに」 erst→zuerst
- 4) 「{その数のことは彼は忘れている [d. Zahlen vergisst er]}」——削除。
- 5) 挿入——「商品の」
- 6) 「同じでも [derselbe]}」→「変わらなくても [gleichbleibend]}」
- 7) 「そこで、そのさきでのずるい言いぐさを見てみよう。」 Nimm nun weiter d. Schlaueheit.→Aber nun weiter die Schlaueheit.
- 8) 「「生産に使われる商品」の「需要供給」がまったく違っている諸市場 [Märkte v. ganz verschiedner „supply and demand“ of „commodities used in production“]」→「生産に使われる商品の需要供給関係がまったく違っている諸市場 [Märkte, wo ganz verschiednes Verhältnis von Nachfrage und Angebot der in Produktion gebrauchten Waren herrscht]}」
- 9) 「その貸付を [den loan]}」→「この貨幣を [dies Geld]}」ここでの「貸付」とは、正確には<貸し付けられた貨幣>という意味であろう。
- 10) 「頓馬 [Esel]}」→「天才 [Genie]}」
- 11) 「わが友 [Freund]}」→「天才 [Genie]}」
- 12) 「現行」 existirend→bestehend
- 13) 「「」および「」」——削除。
- 14) 「売買に関するかぎりでは」——原文は、as far as Kauf u. Verkauf gehn であり、エンゲルス版での soweit es Kauf und Verkauf betrifft とは微妙に異なっているが、この箇所はエンゲルス版のように読むべきところであろう。
- 15) 「こんどは取引は貸し手と借り手とのあいだのそれになる。[D. Geschäft wird nun eins zwischen lender u. borrower.]}」→「それは貸し手と借り手とのあいだのそれである。[Dies ist eins zwischen Verleiher und Borger.]}」
- 16) 「あたかも彼が1000ポンドを3か月間前貸したかのように計算される。[Es wird berechnet als erhalte er 1000 £ für 3 Monate vorgeschossen.]}」——削除。このなかの erhalte は hätte とあるべきところであろう。そう読むかぎり、この1文はむしろ削除されてはならないところであった。「前貸したかのように計算される」のであって、「前貸された」のではない。そしてこれこそ、この箇所で見落とされてはならないポイントなのである。エンゲルスが削除したのは、erhalte にひっかかったからなのであろうか。
- 17) 「にならって [nach]}」→「によって [durch]}」
- 18) 「貸付 [loan]}」→「前貸 [Vorschuß]}」
- 19) 「「」および「」」——削除。

第1に、「¹⁾資本」¹⁾とは「生産に使用される商品」だという、がさつな観念がある。この商品が「²⁾資本」²⁾として現われるかぎりでは、資本³⁾としてのその価値は、商品⁴⁾としてのその価値とは区別されて、その生産的または商業的な使用によってあげられる利潤に表現される。また、利潤率は、たしかに⁵⁾いつでも《買われた》商品の市場価格やこれらの商品の「需要供給」⁶⁾となんらかの関係をもちはするが、しかしさらにそれらとはまったく別の事情によって規定されるのである。また、利率が、一般に利潤率に⁷⁾その限界〔limit〕をもっているということは疑いない。しかしノーマン氏が⁸⁾われわれに語るべきは、この限界がどのようにして規定されるのか、ということなのである。そしてこの限界は、資本の他の諸形態から区別された⁹⁾貨幣資本〔moneyed capital〕の需要供給によって規定されるのである。そこでさらに、貨幣資本〔moneyed capital〕の需要供給はどのようにして規定されるのか？ という問いがノーマンに¹⁰⁾出されるかもしれない。実物資本¹¹⁾の供給と貨幣資本〔monied capital〕の供給とのあいだに目に見えない¹²⁾結びつきがあること、このことは疑いないし、また同様に、貨幣資本〔moneyed Capital〕にたいする生産資本家¹³⁾の需要が現実の生産の事情によって規定されているということも疑いない！¹⁴⁾ ノーマンにあっては、そのことかわりに¹⁵⁾、貨幣資本〔monied Capital〕にたいする需要は貨幣そのもの〔money as such〕にたいする需要とは同じではない、という知恵がある¹⁶⁾だけであり、そして、こういう教えが出てくるのは、ただ、彼やオウヴェストンやその他の通貨予言者たちの背後には、いつでも、自分たちが人為的立法的な干渉¹⁷⁾によって通貨そのもので「資本」を¹⁸⁾つくりだして利率を引き上げようと努めている¹⁹⁾という良心のやましさがあるからにほかならないのである！^{20) 21)}

- 1) 「「」および「」」——削除。
- 2) 「「」および「」」——削除。
- 3) 「資本」——エンゲルス版でも強調されている。
- 4) 「商品」——エンゲルス版でも強調されている。

- 5) 「たしかに [certainly]」→「無条件に [undedingt]」
- 6) 「「」および「」」——削除。
- 7) 「利潤率に」 in d. Profitrate→an der Profitrate
- 8) 挿入——「まさに」
- 9) 「区別された」——エンゲルス版では強調されている。
- 10) 「ノーマンに」——削除。
- 11) 「実物資本 [real capital]」→「物的資本 [sachliches Kapital]」
- 12) 「目に見えない」 secret→still
- 13) 「生産資本家」→「産業資本家」
- 14) 「！」→「。」
- 15) 「そのことかわりに [statt dessen]」→「これについて説明をするかわりに」
- 16) 「ノーマンにあっては……知恵がある」→「ノーマンは……知恵をわれわれに売りつける」
- 17) 「人為的立法的な干渉」 künstlich legislatorische interference→künstliche legislatorische Einmischung
- 18) 「通貨 [currency] そのもので「資本」を」→「流通手段そのものから資本を」
- 19) 「努めている」 suchen→bestrebt sein
- 20) 「！」→「。」
- 21) このあとに、「1857年の委員会からの引用。[Citate v. Committee 1857.]」と書かれている。あとから書き込まれたもののように思われる。

次はオウヴァストン氏¹⁾であって、その陳述のなかで²⁾彼は、国内で「資本」が欠乏している [scarce] ということを理由に彼の「貨幣 [Geld]」にたいして「³⁾10%³⁾」を取るのはどういうわけなのか、ということを説明しなければならない。

- 1) 「オウヴァストン氏」→「ロード・オウヴァストン、またの名サミュエル・ジョーンズ・ロイド」
- 2) 「その陳述のなかで」——削除。
- 3) 「「」および「」」——削除。

「第3653号。利子率の変動は次の二つの原因のうちの一つから生じます。

すなわち、資本の価値の変化から生じるか〔 〕（¹待て²！ 資本の価値とは、一般的に言えば、利子率³だ！ だから、利子率の変化は利子率の変化から⁴ 生じるということになる！⁵ ⁶資本の価値⁶は、理論的には、そして⁷前にも述べたように、それ以外の意味では使われ⁸ない！⁹あるいは¹⁰、オウヴァストン氏が資本の価値ということで利潤率を考えているのであれば、この深遠な思想家は、利子率は利潤率によって規制される、ということに逆戻りするわけだ！）〔「 または 国内にある 貨幣の総額の変化から生じます。利子率の大きな変動、というのは変動の持続または規模から見て大きいのですが、そのような変動はすべて明らかに資本の価値の変動にまでさかのぼることができます。このような事実の実例としては、1847年の利子率の上昇、および¹¹最近2年間（1855年および1856年？¹²）のそれ以上に適切なものはありません。小さいほうの利子率変動は貨幣量¹³の変化から生じるもので、それはその規模とその持続《のどちら》から見ても小さなものです。このような変動は頻繁であり、また頻繁であればあるほど、その定められた¹⁴目的を達成するのにそれだけ有効なのです。〕（つまり、オウヴァストンのような¹⁵銀行業者を肥らせるのに有効である。S. ガーニ氏¹⁶は、この点について、1848年の上院での証言のなかで¹⁷、次のように、非常に素朴に自分の考えを述べている。¹⁸「第1324号。あなたの意見では、昨年生じた利子率の大きな変動は、銀行業者ないし貨幣取扱業者〔Dealers in money〕にとって有利だったのですか、それともそうではなかったのですか？——貨幣取扱業者には有利だ¹⁹」と思います。取引上のすべての変動が、事情通には有利です。」「第1325号。といっても、利子率が高くなれば、最上の客を貧しくすることで、銀行業者も結局は損をすることになるのではないのでしょうか？——いいえ、そういう影響が目につくほどあるとは思いません。）」（これが言いたいところなのだ。）²⁰

1) この「〔」は、草稿では角括弧になっている。

2) 「待て〔stop〕」→「すばらしい〔vortrefflich〕」

- 3) 挿入——「なの [ja]」
- 4) 草稿ではここに、「から [from]」が（誤って）2つ書かれている。
- 5) 「！」→「。」
- 6) 挿入——「「および「」」
- 7) 「そして」——削除。
- 8) 「使われ [gebraucht]」→「解され [gefaßt]」
- 9) 「！」→「。」
- 10) 挿入——「また [aber]」
- 11) 挿入——「また」
- 12) 「？」——削除。
- 13) 「貨幣量 [the quantity of money]」→「現存の貨幣の額」
- 14) 定められた [destined] ——削除。
- 15) 「オウヴァストンのような [like Overstone]」→「オウヴァストン流の [à la Overstone]」
- 16) 「S. ガーニ氏」→「わが友サミュエル・ガーニ」
- 17) 「上院での証言のなかで」→「上院委員会『商業的窮境』1848年、で」
- 18) 以下の2つの証言だけは、1848年の上院委員会での証言から取られている。
- 19) 「有利だ」→「有利だった」
- 20) 「（これが言いたいところなのだ。）」——この1文は、やや太い筆跡になっており、あとから書かれたのではないかと思われる。この文の最後は右端まできているが、この1文を除いてみれば、次行が改行になっていると判断できる。

貨幣量によって影響されるものとしての利子率¹¹⁾には、あとで立ち返ることにしてしよう。しかし、¹²⁾注目しなければならないのは、オウヴァストンがここでもまた、一つの取り違え [quid pro quo] をやっている、ということである。貨幣資本 [moneyed capital] にたいする需要が1847年に増加したのは（10月¹³⁾ 以前には¹⁴⁾ 「貨幣量」¹⁵⁾ からくる心配¹⁶⁾ はなかった）さまざまな原因からであった。¹⁷⁾穀物の騰貴、綿花価格の上昇、過剰輸入¹⁸⁾ による砂糖の販売不能、鉄道投機¹⁹⁾、《外国》諸市場の綿花¹⁰⁾供給過剰、東インド投機、等々¹¹⁾。これらすべてのことが、貨幣資本 [moneyed capital] にたいする需要、すなわち信用と貨幣とにたいする需要の増大をひき起こした、すなわちまったく違った諸原因から、すなわち過剰生産と過少生産、等々から [後者が生じたのである]。¹²⁾ 貨幣資本 [moneyed capi-

tal] にたいする需要の増大は、現実の生産過程¹⁸⁾のうちにその原因があった。しかし、原因がなんであろうと、貨幣資本 [moneyed Capital] の価値を、だからまた資本の価値を¹⁴⁾上昇させたのは、貨幣資本 [moneyed Capital] にたいする需要だったのである。前ロイド氏¹⁵⁾が、貨幣資本 [moneyed capital] の価値は上がった、なぜならばそれは上がったからだ¹⁶⁾、と言いたいのなら、それはごもっともなこと¹⁷⁾ではある。しかし、彼がここで資本の価値¹⁸⁾ということ、利子率の上昇の原因としての利潤率の上昇のことを考えているのなら、それが誤りだということはすぐわかるであろう。貨幣資本 [moneyed capital] にたいする需要、だからまた資本の価値¹⁹⁾は、利潤が下がっても、上がることもありうる。その相対的な供給が減れば、その価値²⁰⁾は上がるのである。前ロイド氏²¹⁾が証明しようとするのは、1847年の恐慌⁽²²⁾およびそれに伴った利子率 [の高騰²³⁾] ²²⁾は「貨幣量²⁴⁾」とは、すなわち、彼が息を吹き込んだ1844年の法²⁵⁾の諸規定とはなんの関係もなかった、ということなのである。ところが実際には、銀行準備高 [Bankreserve] ——ロイドたち²⁶⁾の創造物 [creation] ——の枯渇にたいする恐怖が10月²⁷⁾の恐慌に貨幣パニックをつけ加えたかぎりでは、それとこれとのあいだには関係があったのである。しかし、このことはここでの問題の要点ではない。そこには、貨幣資本の逼迫 [pressure for monied capital]²⁸⁾があった。その||323|原因は、穀物不足、投機、砂糖の過剰輸入、等々の結果としての再生産過程の攪乱によってもたらされた、過大な諸操作であった²⁹⁾。穀物が1クォーター当たり120シリング³⁰⁾だったときにそれを買った人々が、それが60シリング《に》下がったときに必要とした³¹⁾のは、60シリングであった。欠乏していたのはそれを埋める信用であった。³²⁾ それは、もとの価値を貨幣に転換するための銀行券の欠乏ではなかった。³³⁾ 砂糖がひどく下落したときの、それを輸入しすぎている人々も同様であった。³⁴⁾ また、自分の「浮動資本 [floating capital]³⁵⁾」を鉄道に投下して³⁶⁾しまっていて、この資本のうち自分の事業で必要な「本物の」部分を借金に頼った人々が必要としたも

の³⁷⁾も、そうであった。すべてこうした、貨幣資本の逼迫〔pressure for moneyed capital〕³⁸⁾は、かのロイド³⁹⁾にとっては、「彼の貨幣の価値」が上昇したという一種の「道徳感覚」⁴⁰⁾に表現され、そして⁴¹⁾このような貨幣資本〔monied capital〕の価値の上昇は、⁴²⁾直接に、実物資本〔real capital〕（商品資本等々⁴³⁾）の《貨幣》価値の低下⁴⁴⁾に対応していた。一方の形態にある資本の価値が上がったのは、他方の形態にある資本の価値が下がったからである。ところが、前ロイド氏⁴⁵⁾は、このような二つの資本の価値を⁴⁶⁾同一視しようとし、しかも、両者を「通貨〔circulation〕」の、貨幣〔money〕の欠乏なるもの⁴⁷⁾に對置することによってしようとする。だが、同じ額の貨幣資本〔monied Capital〕でも、非常に違った量の流通媒介物⁴⁸⁾で貸し付けられることができるのである。

- 1) 「貨幣量によって影響されるものとしての利率」→「現存の貨幣の額が利率に及ぼす影響」
- 2) 挿入——「すでにいま」
- 3) 「10月」の上に「これよりあとの月々」と書かれている。
- 4) 挿入——「貨幣の欠乏、彼がさきに言っていたような」
- 5) 「貨幣量」→「現存の貨幣の額」
- 6) 「心配〔Sorge〕」→「恐れ〔Furcht〕」
- 7) 草稿では、ここに「く」があるが、不要であろう。
- 8) 「過剰輸入〔Ueberimport〕」→「過剰生産」
- 9) 挿入——「と崩落」
- 10) 「綿花」→「綿製品」
- 11) 「東インド投機、等々」→「上述した、ただの空手形操作を目的とする強行的な対インド輸出入」
- 12) 「これらすべてのことが、貨幣資本〔moneyed capital〕にたいする需要、すなわち信用と貨幣とにたいする需要の増大をひき起こした、すなわちまったく違った諸原因から、すなわち過剰生産と過少生産、等々から〔後者が生じたのである〕。」→「これらすべてのことが、工業での過剰生産ならびに農業での過少生産が、つまりまったく違った諸原因が、貨幣資本にたいする需要、すなわち信用と貨幣とにたいする需要の増大をひき起こしたのである。」
- 13) 「現実の生産過程」→「生産過程そのものの歩み」
- 14) 「貨幣資本の価値を、だからまた資本の価値を」→「利率を、貨幣資本の

価値を」

- 15) 「前ロイド氏」→「オウヴェストン」
- 16) 「なぜならば……からだ」——エンゲルス版では強調されている。
- 17) 「ごもっともなこと [richtig]」→「同義反復」
- 18) 「資本の価値 [value of capital]」→「[資本の価値]」
- 19) 「資本の価値 [value of capital]」→「[資本の価値]」
- 20) 「価値 [value]」→「[価値]」
- 21) 「前ロイド氏」→「オウヴェストン」
- 22) 「(「) および (「)」) ——削除。
- 23) 「利率 [の高騰]」→「高い利率」
- 24) 「貨幣量」→「現存する貨幣の量」
- 25) 「法」→「銀行法」
- 26) 「ロイドたち」→「オウヴェストン」
- 27) 「10月」→「1847—48年」
- 28) 「貨幣資本の逼迫 [pressure for monied capital]」→「貨幣資本の欠乏 [Geldkapitalnot]」
- 29) 「穀物不足 [Kornausfall], 投機, 砂糖の過剰輸入, 等々の結果としての再生産過程の攪乱によってもたらされた, 過大な操作 [d. Größe d. Operationen] であった」→「現存資金と比べての過大な操作だったのであり, そしてそれが勃発したのは, 凶作, 鉄道への過大投資, ことに綿製品の過剰生産, インドや中国との思惑取引, 投機, 砂糖の過剰輸入, 等々の結果としての再生産過程の攪乱によってであった」
- 30) 「シリング」——草稿では, 「ポンド [!]」と書かれている。
- 31) 「必要とした」→「失った」
- 32) 「であった。欠乏していたのはそれを埋める信用であった [Ausfall d. Credit dafür]。」→「であり, またそれに相当するだけの穀物担保前貸での信用であった。」
- 33) 「それは, 元の価値を貨幣に転換するための銀行券の欠乏ではなかった。 [Es war nicht want of notes, um d. alten Werth in Geld zu convertiren.]」→「彼らの穀物を120シリングというもどおりの価格で貨幣に転換することを妨げたものは, けっして銀行券の欠乏ではなかった。」
- 34) 「砂糖がひどく下落したときの, それを輸入しすぎていた人々も同様であった。 [Ebenso die d. Zucker überimpotirt hatten, als er tief fiel.]」→「砂糖を輸入しすぎてやがてそれがほとんど売れなくなったという人々の場合も同様であった。」

- 35) 「浮動資本 [floating capital]」→「流動資本 (浮動資本 [floating capital])」
- 36) 「投下して」→「固定して」
- 37) 「この資本のうち自分の事業に必要な「本当の」部分を借金に [auf Pump] 頼った人々が必要としたもの」→「自分の「本当の」事業の流動資本の補填のためには信用に頼った人々の場合」
- 38) 「すべてこうした、貨幣資本の逼迫 [pressure for moneyed capital]」→「すべてこのようなこと」
- 39) 「かのロイド」→「オウヴァストン」
- 40) 「彼の貨幣の価値」が上昇したという一種の「道徳感覚」[“a moral sence of the enhanced “value of his money”]」→「[彼の貨幣の価値が上昇したという一種の道徳感覚 (a moral sence of the enhanced value of his money)]」
- 41) 「され、そして」→「された。しかし」
- 42) 挿入——「他方では」
- 43) 「等々」→「および生産資本」
- 44) 「貨幣価値の低下」der depreciated money-value→der gefallne Geldwert
- 45) 「前ロイド氏」→「オウヴァストン」
- 46) 「このような二つの資本の価値を」→「このような違った資本種類の二つの価値を資本一般のただ一つの形態として」
- 47) 「通貨 [circulation]」の、貨幣 [money] の欠乏なるもの」→「流通手段の、現存する貨幣の欠乏なるもの」
- 48) 「流通媒介物 [circulating media]」→「流通手段」

そこで、彼の挙げる1847年の例をとってみよう。¹⁾

1) エンゲルス版では、ここで改行されていない。

《銀行》利子率¹⁾は次のようであった。1月、だいたい²⁾ 3—3 ½%。2月、4—4 ½%。3月、だいたい 4%。4月 (パニック)、4—4 ½%。5月、5—5 ½%。6月、だいたい 5%。7月、5%。8月、5—5 ½%。9月、5%、ただし、5 ¼%、5 ½%、6%と小変動あり。10月、5%、5 ½%、7%。11月、7—9%³⁾。12月、5—7%⁴⁾。⁵⁾

- 1) 「銀行利子率」→「イングランド銀行の公定利子率」 エンゲルス版では、このように、草稿での「銀行利子率」を「イングランド銀行の公定利子率」と修正しているが、公定利子率は最低利子率であったのであって、ここに挙げられている数字は最低利子率以上の市場利子率（イングランド銀行が実際に実行した利子率）である。しかし、ここでマルクスが挙げている数字と、銀行法委員会報告、1857年、第2部、付録で見ることのできる数字とは、完全には合致していない。
- 2) 「だいたい [im Ganzen]」——削除。
- 3) 「7—9%」→「7—10%」
- 4) 「5—7%」→「7—5%」
- 5) エンゲルス版では、ここで改行されていない。

この場合には、利子が上がったのは、利潤が減って諸商品の価値〔諸商品の価格で表現された〕¹⁾が非常に大きく下がったからである。だから、この場合に前ロイド氏²⁾が、1847年に利子率が上がったのは、資本の価値が上がったからだ、と言うのならば、³⁾彼が資本の価値ということで考えているものは貨幣資本 [moneyed capital] の価値でしかありえないのであり、しかもこれが利子率なのである⁴⁾。しかし、あとで彼は、おべんちゃらをちょろりと出す。そして⁵⁾資本の価値が利潤率と同一視されるのである。⁶⁾そのうえ、前ロイドは、1856—57年に支払われた高い利子率の一部が、利子を利潤からではなく他人の資本から支払う信用山師たちが盛んに活動していたことの兆候だった、ということを知らなかった。⁷⁾⁶⁾ ⁸⁾しかし⁹⁾彼は、1857年の恐慌の¹⁰⁾数か月前にも、「事業はまったく健全だ」と思っていた¹¹⁾のである。〔 〕

- 1) 「価値〔諸商品の価格で表現された〕」→「貨幣価値」 なお、草稿では、閉じ括弧「}」は「)」となっている。
- 2) 「前ロイド氏」→「オウヴァストーン」
- 3) 挿入——「ここで」
- 4) 「これが利子率なのである」→「貨幣資本の価値こそは、まさに利子率なのであって、それ以外のなにものでもないのである」
- 5) 「彼はおべんちゃらをちょろりと出す [d. Fuchsschwanz herausstrecken]」。そして→「おべんちゃらがちょろりと出てきて、」なお、Fuchsschwanz は

<狐のしっぽ>であるが、<狐のしっぽを出す>というのは、ドイツ語では、お世辞を言うとか、おべっかを使うというニュアンスをもつ句であって、<正体を現わす>という意味ではない。それは、たとえば „Wer mit den Fuchs geht, muß mit dem Schwanz wedeln.“ (狐といっしょに行くひとは、ご機嫌とらねばなりません)ということわざでの Schwanz を見ればわかる。Vgl: „Fuchsschwanz“ in: Grimms Deutsches Wörterbuch.

- 6) 「() および 「 」」——削除。エンゲルス版では、前者の「()」のところで改行されている。
- 7) 「そのうえ、前ロイドは、1856—57年に支払われた高い利率の一部が、利子を利潤からではなく他人の資本から支払う信用山師たちが盛んに活動していたことの兆候だった、ということを知らなかった。」→「1856年に支払われた高い利率について言えば、じっさいオウヴァストーンは、それが一部分は一種の信用山師、つまり利子を利潤からではなく他人の資本から支払う山師が表面に出てきたことの兆候だったということを知らなかった。」
- 8) 「()」——削除。なお、この最後の1文は、狭い行間に詰め込まれるように書かれている。あとから書き込まれたものであろう。
- 9) 「しかし」——削除。
- 10) 挿入——「ほんの」
- 11) 「思っていた [nahm an]」→「主張していた」

¹⁾「第3722号。利率の上昇によって事業の利潤がなくなるという考えはまったくまちがっています。第1に、利率の上昇はめったに長続きしません。第2に、もしそれが長く続くものであり、高水準のものであるとすれば、それは実際に資本の価値の上昇なのですが、ではなぜ資本の価値が上がるのか？ それは利潤率が増加したからです。」(²⁾つまりわれわれはここで、「資本の価値」の隠された一方の意味を嗅ぎつけたわけである。³⁾ ちなみに、利潤率はかなり長い期間にわたって高いのに企業利得⁴⁾は減少し利率は上がる、ということ、⁵⁾ [利子が] 利潤のかなり大きな部分を呑みこむ、ということもありうるのである。)²⁾

- 1) 挿入——「彼は、さらに次のように述べている。」
- 2) 「() および 「 」」——削除。
- 3) 「つまりわれわれはここで、「資本の価値」の隠された一方の意味を嗅ぎつけたわけである。」→「つまりわれわれはここで、ついに、「資本の価値」がど

んな意味もっているかを知らされるわけである。」

- 4) 「企業利得」→「企業者利得」
- 5) 挿入——「したがって [so daß]」

「第3724号。利率の上昇は、わが国の事業の非常な増大と、利潤率の大きな上昇との結果でした。そして、利率の上昇はこの上昇自身の原因だった二つのことをだめにする苦情を言うのは、どうしようもない一種の論理的不合理です。」¹⁾

- 1) エンゲルス版 (1894年版) では、ここで改行されていない。

これは、かりに彼が次のように言ったとした場合とまったく同様に、合理的である。すなわち、「¹⁾利潤率の上昇は商品価格の投機的な高騰の結果だったのであり、そして、価格高騰は……を²⁾だめにする苦情を言うのは……³⁾、云々¹⁾と。あるものが⁴⁾それ自身の原因であるものをだめにするということは、ただ高い利率に惚れ込んだ高利貸において⁵⁾のみ「非論理的」⁶⁾なのである。ローマ人の偉大さは彼らが行なったもろもろの「⁷⁾征服」⁷⁾の原因だったが、彼らが行なった征服はその「偉大さ」⁸⁾をだめにした。富は奢侈の原因であるが、奢侈は富をだめにする、等々⁹⁾。この「のらくら者め」が！¹⁰⁾この成り上がり貴族¹¹⁾の百万長者の「論理」が全イギリスに抱かせた尊敬の念以上に、今日の時代¹²⁾の白痴性をよく表わしうるものはない。それはともかく、高い利潤率や事業の拡張は高い利率の原因だ¹³⁾としても、それだからといって、高い利率はけっして高い利潤、等々¹⁴⁾の原因ではないのである。そして問題はまさに、高い利潤率が消えてなくなった [flöten gegangen] あとでも、この高い利子（恐慌のときに現実に現われるような）が続いてはいなかったか、¹⁵⁾ということなのである！¹⁶⁾

- 1) 「「」および「」」——削除。
- 2) 「…… [etc.] を」→「この上昇自身の原因を、つまり投機を」
- 3) 「…… [etc.]」→「……一種の論理的不合理です」

- 4) 挿入——「ついには」
- 5) 「において [in]」→「にとって [für]」
- 6) 「「非論理的」」→「一種の論理的不合理」
- 7) 「「」および「」」——削除。
- 8) 「「偉大さ [la grandeur]」」→「彼らの偉大さ」
- 9) 「, 等々」——削除。
- 10) 「この「のらくら者め」が! [Dieser „Schaffe“!]」→「このずい奴め! [Dieser Pffikus!]」ここで「のらくら者め」と訳したのは、筆者のノートにある Schaffe という意味不明の(男性名詞の)語であって、それを Schlaraffe と読んでおいたものである。
- 11) 「成り上がり貴族 [dunghill aristocrat]」——dunghill の上に、この語をドイツ語に訳した「堆肥 [Düngerhaufen]」という語が書かれている。OED によると、dunghill には、“Applied opprobriously to a person of evil life, or of base station” という語義があり、用例として、Thomas Becon の “Reliques of Rome” (1553年), Shakespeare の “The Life and Death of King John” の第3幕第4場87行 (1595年), John Spencer の “A Discourse concerning Prodigies”, 2. ed. (1665年), からの3例が挙げられている。ここで、マルクスはこの語によって、オウヴァストンが a person of base station であること、つまり「成り上がり者」であることを揶揄しているものと思われる。それゆえ、「成り上がり貴族」という岡崎訳は、けだし適訳と言うべきであろう。
- 12) 「今日の時代 [Jetztzeit]」→「今日のブルジョア世界」
- 13) 「だ」→「でありうる」
- 14) 「, 等々」——削除。
- 15) 挿入——「またははじめて絶頂に達しなかったか、」
- 16) 「!」——削除。

「第3718号。割引率の非常な上昇について言えば、それはまったく資本の価値の増大から生じる事情であって、この資本の価値の増大の原因は、だれでもまったく明らかに発見できることだと思えます。私がすでに示唆した事実ですが、この〔銀行〕法が実施されていた13年間にこの国の貿易は4500万ポンドから1億2000万ポンドに増大しました。この簡単な数字に含まれているすべての出来事をよく考えてください。これほど巨大な貿易増加を処理するための莫大な資本需要を考えてみてください。また同時に、

この大需要にたいする供給の自然的な源泉、すなわちこの国の年々の貯蓄が、最近の3年か4年のあいだに戦争目的のための、利益を生まない出費に食われてしまったことを考えてみてください。あからさまに言えば、私は利子率をもっと高くなならないことを意外に思っています。言い換えれば、この巨大な操作を処理するための資本の逼迫¹⁾が、皆さんがすでにご存じであるよりもはるかに切迫したものでないことを、私は意外に思っているのです。」

- 1) 「資本の逼迫 [the pressure for capital]」→「資本の欠乏 [Kapitalklemme]」

この¹⁾ 高利貸論理家のこの奇妙な、用語の混乱ぶり！²⁾

- 1) 「この」→「わが」
 2) 「この奇妙な、用語の混乱ぶり [dieser strange jumble of words]！」→「なんというすばらしい用語の混同ぶりだろう！」
 3) エンゲルス版では、ここで改行されていない。

ここでまたまた彼は得意の「資本価値の増大」³⁾を持ち出すのだ！こやつは²⁾、一方の側ではこのような非常な再生産過程の拡張、つまり実物資本³⁾の蓄積が行なわれ、他方の側には「⁴⁾これほど巨大な貿易増加を処理するための⁵⁾莫大な……⁶⁾需要」が向かっていった「資本」があった、と思込んでいるのか！⁷⁾ ⁸⁾この増加⁹⁾はそれ自身資本の増加ではなかったのか、そしてこの増加が「¹⁰⁾需要」¹⁰⁾をつくりだしたとき、それは同時に「¹¹⁾供給」¹¹⁾をもつくりだしたのではないのか、そしてまた同時に「¹²⁾貨幣資本 [monied capital]」¹²⁾の供給の増加さえをもつくりだしたのではないのか？ 利子が高くなった¹³⁾なら¹⁴⁾、それはただ、貨幣資本 [monied capital] にたいする需要がその¹⁵⁾供給よりもっと速く¹⁶⁾増大したからでしかない。このことは、言い換えれば、実物的¹⁷⁾生産が拡大するにつれてこの生産の運営¹⁸⁾が信用制度 [Creditsystem] の基礎の上で拡大されたということに帰着する。¹⁹⁾信用制度なしには、実物的な膨張が「融

通」にたいする需要の増大と一緒に生じるはずがない²⁰⁾のであり、そしてこのこと²¹⁾こそは、明らかに、「²²⁾莫大な需要」ということでこの銀行家²³⁾が考えているものである。輸出貿易を4500万から1億2000万に増加させたものが資本にたいする²⁴⁾需要²⁵⁾の膨張でないことはたしかである。さらにまた、前ロイド氏²⁶⁾が、《クリミア》戦争に食われてしまった「²⁷⁾この国の年々の貯蓄」²⁷⁾こそは「²⁸⁾この大需要にたいする供給の自然的な源泉」²⁸⁾をなすものだ、と言うとき、それはいったいどういう意味なのか？ 第1に、とるに足りない²⁹⁾クリミア戦争とは³⁰⁾違った戦争だった1799³¹⁾—1815年のイギリスは、³²⁾なにで蓄積をしたのか？ 第2に、もし自然的な源泉が枯渇したとき、³³⁾資本はどんな源泉から供給されたのか？ イギリスは周知のように外国から借金をして³⁴⁾はいなかった。³⁵⁾もし「³⁶⁾自然的な」³⁶⁾源泉とは別にさらに「³⁷⁾人為的な」³⁷⁾源泉があるのなら、戦争では「³⁸⁾自然的な」³⁸⁾源泉を利用し事業では「³⁹⁾人為的な」³⁹⁾源泉を利用するということは、じっさい一国にとって最も望ましい方法ではなかろうか？⁴⁰⁾ ⁴¹⁾もしもただ旧来の貨幣資本〔monied Capital〕があるだけだったら、それは高い利率によってその効果を2倍にすることができたであろうか？ 前ロイド氏⁴²⁾は、明らかに、国民⁴³⁾の「⁴⁴⁾年々の貯蓄」⁴⁴⁾(といっても、この場合には「⁴⁵⁾食われ」⁴⁵⁾てしまった⁴⁶⁾のだが)はただ貨幣資本〔moneyed Capital〕に転化するだけだ、と思っている。だが、もし現実の蓄積⁴⁷⁾が生じなかったとすれば、この生産にたいする貨幣債権⁴⁸⁾の蓄積がいったいなんの役にたつのだろうか？

- 1) 「「」および「」」——削除。
- 2) 「こやつは〔Bursche〕」→「彼は」
- 3) 「実物資本」 real capital→wirkliches Kapital
- 4) 「「」——削除。
- 5) 挿入——「「」
- 6) 「……」——削除。
- 7) 「思い込んでいるのか！」→「思い込んでいるらしい。」
- 8) 挿入——「それならば」

- 9) 「この増加」→「生産のこの巨大な増加」
- 10) 「「」および「」」——削除。
- 11) 「「」および「」」——削除。
- 12) 「「」および「」」——削除。
- 13) 「高くなった」→「非常に高く上がった」
- 14) 「なら」→「としても」
- 15) 「そのの」——削除。
- 16) 「もっと速く」schneller→rascher
- 17) 「実物的 [real]」→「産業的」
- 18) 「その運営」d. carrying on derselben→ihre Führung
- 19) 挿入——「換言すれば」
- 20) 「このことなしには、実物的 [real] 膨張が「融通」にたいする需要の増大と一緒に生じるはずがない」→「現実の産業膨張が「融通」にたいする需要の増大を引き起こした」
- 21) 「このこと」→「このあとのほうの需要」
- 22) 挿入——「資本にたいする」
- 23) 「この銀行家」→「わが銀行家」
- 24) 挿入——「たんなる」
- 25) 「需要」——エンゲルス版でも強調されている。
- 26) 「前ロイド氏」→「オウヴェアストーン」
- 27) 「「」および「」」——削除。
- 28) 「「」および「」」——削除。
- 29) 「とるに足りない [puny]」→「小さい [klein]」
- 30) 挿入——「まったく」
- 31) 「1799」→「1792」
- 32) 挿入——「いったい」
- 33) 挿入——「いったい」
- 34) 「借金をする [pumpen]」→「前貸を受ける [Vorschüsse nehmen]」
- 35) 挿入——「だが、」
- 36) 「「」および「」」——削除。
- 37) 「「」および「」」——削除。
- 38) 「「」および「」」——削除。
- 39) 「「」および「」」——削除。
- 40) 「はなかろうか？」→「あろう。」
- 41) 挿入——「しかし、」

- 42) 「前ロイド氏」→「オウヴェストン氏」
- 43) 「国民 [Nation]」→「この国」
- 44) 「「」および「」」——削除。
- 45) 「「」および「」」——削除。
- 46) 挿入——「という」
- 47) 挿入——「すなわち生産の増大や生産手段の増加」
- 48) 「貨幣債権 [moneyed claims]」→「貨幣形態での債権 [Schuldansprüche in Geldform]」

高い利潤率から生じる「資本の価値」の増加を、前ロイド¹⁾は、《貨幣資本 [monied capital] にたいする需要²⁾から生じる「資本の価値」の増加と混同しているのである。ところで、³⁾この需要は利潤率には全然かかわりのない諸原因から増大することもありうるのであって、⁴⁾彼自身も1847年に、⁵⁾実物資本 [real capital] の減少⁶⁾の結果この需要が増大したことを実例として挙げている。彼は一方の意味では実物資本 [real capital] 《の価値》を云々し、他方の意味では貨幣資本 [monied capital] の価値を云々しているのである。⁷⁾

- 1) 「前ロイド」→「オウヴェストン」
- 2) 挿入——「の増加」
- 3) 「ところで [nun], 」——削除。
- 4) 「うるのであって, 」→「うる。」
- 5) 「も1847年に, 」→「も, 1847年に」
- 6) 「減少 [diminution]」→「減価 [Entwertung]」
- 7) 「彼は一方の意味では, 実物資本 [real capital] 《の価値》を云々し, 他方の意味では, 貨幣資本 [monied capital] の価値を云々しているのである。」
→「彼は, 自分の都合だけで資本の価値を現実資本の価値に関係させたり, 貨幣資本に関係させたりするのである。」

[324] やつ¹⁾の不正直さと低劣さ²⁾は、彼が学者ぶって極端化する彼の偏狭な銀行業者の立場³⁾とともども、さらに次の問答のうちにも現われる。⁴⁾

- 1) 「やつ [Kerl]」→「わが銀行貴族」
- 2) 「と低劣さ [Gemeinheit]」——削除。

3) 「銀行業者の立場」bankers Standpoint→Bankierstandpunkt

4) エンゲルス版(1894年版)では、ここで改行されていない。

第3728号。¹⁾「あなたは、割引率は商人にとってたいしたことではないと思う、と言われました。あなたはなにを普通の利潤率とみなされるのか、おっしゃってくださいませんか〔〕。——²⁾ロイド³⁾氏は、これに答えることは「不可能」だと宣言するが、それは厄介な数字関係に巻き込まれないためである⁴⁾。⁵⁾

1) 挿入——「(質問。)」

2) 「——」——削除。

3) 「ロイド」→「オウヴェストン」

4) 「が、それは厄介な数字関係に巻き込まれないためである〔um sich nicht in unangenehme Zahlenverhältnisse zu verwickeln〕」——削除。

5) エンゲルス版(1894年版)では、ここで改行されていない。

第3729号。「平均利潤率がたとえば7—10%であると仮定すると、割引率の2%から7、8%への変化は、もちろん¹⁾利潤率に影響せざるをえないのではありませんか?〔〕——²⁾(この問いそのものが企業利得率³⁾と利潤率とを取り違えている!⁴⁾、また、利潤率が両者の⁵⁾共通な源泉であることを忘れている⁶⁾。利子率は、商業利潤または産業利潤⁷⁾の邪魔をするものだが、利潤率を邪魔しなくてもよいのである。)——⁸⁾〔「第1に、当事者⁹⁾は、自分の利潤をひどく妨げる¹⁰⁾ような割引率を支払わないでしょう。彼らはそうするよりも¹¹⁾、むしろ、自分の事業をやめるでしょう。〔〕{¹²⁾もしもわが身を破滅させずにできるのであれば。彼らが割引料を支払うのは、彼らの利潤が高かぎり、そうしたいからであり、利潤が低くなったときには、そうせざるをえないからである。}〔「割引の意味はなにか? ある人が手形を割引してもらうのはなぜなのか?……それは、より大きい資本量を手に入れたと思うからです。〔〕(ちょっと待て! それは自分の充用した¹³⁾資本の貨幣での還流〔moneyed returns〕を先取りして¹⁴⁾行き詰まりを避けたいと思うからである。満期に

なった支払に応じたい¹⁵⁾からである。より大きい資本量を求めるのは、ただ、事業が好調な場合か、事業は不調でも¹⁶⁾他人の資本で投機をする場合だけである。割引はけっしてたんに事業の拡張のための手段なのではない。彼が信用を与えるのが利潤をあげるためであるように、彼が貨幣の貸し手から利潤を受けようとするのは、彼の事業を継続するためである。¹⁷⁾「〔〕では、彼はなぜ、より大きな資本量にたいする命令権を握ろうとするのか？ それは、この資本を充用したいと思うからです。では、なぜこの資本を充用したいと思うのか？ それは、そうするのが儲かるからです。¹⁸⁾割引率が彼の利潤を消滅させるようならば、それは彼にとって儲けにならないでしょう。」

- 1) 「もちろん [naturally]」→「大いに [wesentlich]」
- 2) 「——」——削除。
- 3) 「企業利得率」→「企業者利得率」
- 4) 「取り違えている [confundiren]！」→「混同している [zusammenwerfen]」
- 5) 「両者の」→「利子と企業者利得と」
- 6) 「忘れている」→「見落としている」
- 7) 「商業利潤または産業利潤」→「企業者利得」
- 8) 「——」——削除。
- 9) 「当事者」→「事業家」
- 10) 「妨げる [interrupt]」→「先取りする」
- 11) 「そうするよりも」——削除。
- 12) 挿入——「そのとおりだ。」
- 13) 「充用した」→「固定した」
- 14) 挿入——「自分の事業の」
- 15) 「たい」→「なければならない」
- 16) 「でも [selbst wenn]」→「のあいだでも [selbst während]」
- 17) 「彼が信用を与えるのが利潤をあげるためであるように、彼が貨幣の貸し手から利潤を受けようとするのは、彼の事業を継続するためである。」——削除。「彼が貨幣の貸し手から利潤を受けようとする」という箇所にある「利潤」は「信用」の誤記であろう。エンゲルスは、これが誤記であることに気付かなかったために、この部分を削除したのであろう。

18) 挿入——「しかし」

〔 〕このひとりよがりの論理家は、手形はただ事業の拡張のためにのみ割引されるもの、そして、事業は儲かるから拡張されるもの、と前提している。第1の前提はまちがいである。普通の事業家が手形を割引させるのは、自分の資本の貨幣形態を先取りし、だから¹⁾ また再生産過程の流動を保つためである。事業を拡張するため、あるいは《追加》資本を割引によって「²⁾調達する」²⁾ためではなく、自分が与える信用を自分が受ける信用によって相殺する³⁾ためである。そして彼が自分の事業を「拡張する」ために割引させるのであれば、それは、彼が信用山師であって投機的な企画をもっているような場合を度外視すれば、⁴⁾ だめになった一つの事業を別の事業で埋め合わせるためであり、また利潤をあげるためではなく他人の資本を自分の手のなかにおくためである。)

- 1) 「だから [daher]」→「それによって [dadurch]」
- 2) 「「」および「」」——削除。
- 3) 「相殺する」compensiren→ausgleichen
- 4) 「そして彼が自分の事業を「拡張する」ために割引させるのであれば、それは、彼が信用山師であって投機的な企画をもっているような場合を度外視すれば、」→「そして、もし彼が自分の事業を信用によって拡張しようと思うならば、彼にとって手形の割引はほとんど役にたたないであろう。割引は、じっさい、ただ、すでに彼の手にある貨幣資本を一つの形態から別の形態に転換することでしかないからである。彼はむしろもっと長期の固定貸付を受けることを選ぶであろう。もちろん、信用山師が自分の空手形を割引させるのは、自分の事業を拡張するためであり、」

ロイド¹⁾氏は、このように割引を「追加の資本量」の取得²⁾と（資本を表わす手形の貨幣³⁾への転化〔conversion〕とではなく）同一視したあとで、責め道具をかけられると、たちまち、もとのところへ退く⁴⁾。⁵⁾

- 1) 「ロイド」→「オウヴァストン」
- 2) 「「追加の資本量」の取得〔Appropriation〕」→「追加資本の借入」

- 3) 「貨幣 [money]」→「現金」
- 4) 「もとのところへ退く」zurückziehen→sich zurückziehen
- 5) エンゲルス版(1894年版)では、ここで改行されていない。

「第3730号。¹⁾商人は、事業をやりだしたからには、一時的には割引率²⁾が上がることがあっても、ある期間は自分の仕事を続けなければならないのではないのでしょうか。【】——これに答えるかわりに高利貸はせせら笑って言う。³⁾「どんな個々の取引でも、ある人が高い利子率ではなくて低い利子率《で資本の》支配権⁴⁾を入手できるなら、そのような限られたものの見方⁵⁾で見るとは、それが彼にとって好都合だということは疑いないことです。」これに反して、前ロイド⁶⁾が、「資本」という言葉でいつでも⁷⁾ただ自分の銀行業者資本 [Bankers' Capital] のことだけを考え、だからまた、手形を⁸⁾割引してもらう人を、その人の資本が商品形態で存在するとか、その人の資本の貨幣形態 [money form] が手形であって、この手形をロイド⁹⁾氏が別の貨幣形態 [money form] に転換するのだとかという理由で、「¹⁰⁾資本をもたない¹⁰⁾人とみなすなら、それは一つの「広げられたものの見方¹¹⁾」ではある。

- 1) 挿入——「(質問。)」
- 2) 「割引率」→「利子率」
- 3) 「これに答えるかわりに高利貸はせせら笑って言う。」→「(オウヴェストン)」
- 4) 「支配権 [command]」→「処分権 [Verfügung]」
- 5) 「限られたものの見方 [limited view of the matter]」→「限られた観点」
- 6) 「前ロイド」→「オウヴェストン氏」
- 7) 「いつでも」→「いま突然」
- 8) 挿入——「彼のところで」
- 9) 「ロイド」→「オウヴェストン」
- 10) 「「」および「」——削除。
- 11) 「「広げられたものの見方 [expanded view of the matter]」」→「限られていない観点」

第3732号。「1844年の銀行法について伺いますが、平均利子率と〔イングランド〕銀行にある地金の額との比率¹⁾がどうであったかをお述べいただけませんか？ 地金の額²⁾が約³⁾900万か1000万ポンドだったときには利子率は6%か7%、また地金の額が1600万ポンドだったときには利子率は《およそ》3%から4%だった、というのは事実でしょうか？ 〔〕——⁴⁾（この質問者は、〔イングランド〕銀行にある地金の量によって影響されるものとしての⁵⁾利子率を、「⁶⁾資本の価値」⁶⁾によって影響されるものとしての⁷⁾利子率から説明することを、彼に強要しようとするのである。）——〔「〕私はそのようには理解していません⁸⁾。……しかし、もしそうであるなら、1844年の法によって取られた処置⁹⁾よりももっと厳しい処置を取らなければならないと思います。なぜなら、地金¹⁰⁾の貯蔵〔store〕が大きいほど利子率は低い、ということが本当だとすれば、われわれはこのようなものの見方に従って、地金¹¹⁾の貯蔵を無限の額にまで増加させることに取り掛からなければならないでしょうし、そうすれば利子をゼロにまで引き下げることになるであろうからです。〕¹²⁾

- 1) 「平均利子率と〔イングランド〕銀行にある地金の額との比率」→「利子率と〔イングランド〕銀行にある金準備とのだいたい比率」
- 2) 「地金の額」→「銀行にある金」
- 3) 「約」——削除。
- 4) 「——」——削除。
- 5) 「ものとしての」→「かぎりでの」
- 6) 「「」および「」」——削除。
- 7) 「ものとしての」→「かぎりでの」
- 8) 「そのようには理解していません」→「そうだとは言いません」
- 9) 「銀行法によって取られた処置」→「銀行法の処置」
- 10) 「地金」→「金」
- 11) 「地金」→「金」
- 12) エンゲルス版（1894年版）では、ここで改行されていない。

ケイリ氏¹⁾は、このまづい頓智にはおかまいなしに次のように続ける。²⁾

- 1) 「ケイリ氏」→「質問者のケイリ」

2) エンゲルス版（1894年版）では、ここで改行されていない。

〔「第3733号。もしそうであるなら、かりに500万の地金¹⁾がイングランド銀行に返されることになっていて、続く6か月間に地金²⁾が約1600万ポンドになり、またこうして利子率がかりに3%ないし4%まで下がったとした場合、この利子率の低下がこの国の事業の非常な縮小から生じたのだと、どうやって主張できるのでしょうか？——私が言いましたのは、利子率の低下ではなくて、利子率の近ごろのひどい上昇が、この国の³⁾事業の大拡張と密接に結びついていたのだということです。〕⁴⁾しかしケイリは、もしも地金⁵⁾の収縮といっしょに生じる利子率の上昇が事業の拡張の兆候であるのなら、地金⁶⁾の増大といっしょに生じる利子率の低下は事業の縮小の兆候であるはずではないかと言って、前ロイドの不条理を突いている⁷⁾のである。⁸⁾⁴⁾⁹⁾

- 1) 「地金」→「金」
- 2) 「地金」→「金」
- 3) 「この国の」——削除。
- 4) 「(」および「)」——削除。
- 5) 「地金」→「金準備」
- 6) 「地金」→「金準備」
- 7) 「言って、前ロイドの不条理を突いている」→「言う」
- 8) 挿入——「これにたいしては、オウヴァストンはなにも答えない。」
- 9) エンゲルス版（1894年版）では、ここで改行されていない。

「第3736号。¹⁾閣下²⁾が言われたのは、貨幣〔money〕は資本を手に入れるための用具だということだと思います。〔「貨幣をただ用具としか考えない³⁾という、まさにこのことがたわごと⁴⁾なのである。貨幣は資本の形態⁵⁾である。〕〔「地金が流出している⁶⁾場合には、資本家たち⁷⁾にとっての大きな負担⁸⁾は、逆に、貨幣を入手すること⁹⁾なのではありませんか？——そうではありません。貨幣を手に入れたいのは資本家ではありません。それは資本家でない人々です。では、なぜ彼らは貨幣を手に入れ

たいのか?……なぜなら、貨幣によって彼らは、資本家ではないこの人々の事業を営むために資本家の資本にたいする支配権を手に入れるからです。」ここでは彼は、製造業者や商人は資本家ではないということ、そして、資本家の資本とは貨幣資本 [moneyed capital]¹⁰⁾なのだというこを、あけすけに言明しているのである。¹¹⁾

- 1) 挿入——「(質問。)」
- 2) 「閣下」→「あなた(原文ではどこでも閣下 [Your Lordship] となっている)」
- 3) 「しか考えない」→「考える」
- 4) 「たわごと [Blödsinn]」→「間違い [Verkehrtheit]」
- 5) 「形態」——エンゲルス版でも強調されている。
- 6) 「地金が流出している」→「金準備 [イングランド銀行の] が減少する」
- 7) 「資本家たち」——エンゲルス版でも強調されている。
- 8) 「負担 [strain]」→「困難」
- 9) 「貨幣を入手すること」→「貨幣を入手できないこと」
- 10) 挿入——「だけ」
- 11) エンゲルス版(1894年版)では、ここで改行されていない。

「第3737号。それでは為替手形を振り出す側の人々¹⁾は資本家ではないのですか?——手形を振り出す側の人々²⁾は資本家であることもありましようし、資本家でないこともあるでしょう。」ここで彼は途方にくれる³⁾。

- 1) 「側の人々」→「人々」
- 2) 「側の人々」→「人々」
- 3) 「途方にくれる [auf d. Pott sitzen]」→「動きがとれない [festsitzen]」
Flügel-Schmidt-Tanger, „Wörterbuch der Englischen und Deutschen Sprache für Hand- und Schulgebrauch“, 2. Teil: Deutsch-Englisch,によれば, auf den Pott setzen とは, 俗語で to put to a non-plus の意味である。

次に彼が尋ねられるのは、商人たちが振り出す¹⁾手形は彼らが売ったかまたは船積みした財貨²⁾を表わしているものではないのか、ということである。彼は、銀行券が地金³⁾を表わしているのとまったく同様に⁴⁾これら

の手形が商品の価値を表わしている、ということを否定する。これはかなり厚かましい。{第3740号, 第3741号}⁶⁾

- 1) 「商人たちが振り出す」→「商人たちの」
- 2) 「財貨」→「商品」
- 3) 「地金」→「金」
- 4) 「まったく同様に」 ganz..., wie→ganz so..., wie
- 5) 「かなり [rather]」→「いささか [etwas]」
- 6) 「}」——草稿では、「)」となっている。

「第3742号。彼¹⁾の目的は貨幣を手に入れることではないのですか？——いいえ、貨幣を手に入れることは、手形を振り出すときの目的ではありません。貨幣を手に入れることは、手形を割引してもらうときの目的なのです!²⁾ (³⁾手形を振り出すことは商品を信用貨幣の1形態に転換することであり、手形を割引することはこの信用貨幣を別の信用貨幣に転換することである(銀行券の場合)⁴⁾。しかし⁵⁾ロイド⁶⁾氏は、ここでは、割引の目的が貨幣 [money] を手に入れることだということを認めている。前には⁷⁾、彼が割引をさせたのは、資本を一つの形態から別の形態に転換する [convert] ためではなく、追加資本を調達する [raise] ためだったのだ。)⁸⁾

- 1) 「彼」→「商人」
- 2) 「!」→「。」
- 3) 「(」および「)」——削除。
- 4) 「別の信用貨幣に転換することである(銀行券の場合 [wenn Noten])」→「別の信用貨幣すなわち銀行券に転換することである」
- 5) 「しかし」→「とにかく」
- 6) 「ロイド」→「オウヴァストン」
- 7) 「前には」 früher→vorher

「第3743号。あなたが1825年, 1837年, 1839年に起こったと言われるようなパニックの逼迫¹⁾のもとでの商業界の大きな願いはなんですか？ 彼らの目的は、資本を手に入れることですか、それとも法貨²⁾を手に入れる

ことですか？——彼らの目的は、自分の事業を続けて行くために資本にたいする支配権を手に入れることです。」(8)彼らの目的は、信用の欠乏(9)が現われたので、また同時に(5)、自分の商品等々(6)を価格よりも安く売りとばさなくてもよいようにするために、自分(7)あての(8)手形にたいする支払手段を手に入れることである。彼らの有価証券がいかかわしい、等々のものであれば、あるいは(9)彼ら(10)が全然資本をもっていなければ(11)、彼らは支払手段と同時にもちろん資本をも手に入れるわけである。なぜならば、彼らは等価なしに価値を手に入れるのだからである。貨幣そのものにたいする需要(12)は、いつでもただ、価値にとっての、商品または手形(債権)の形態から貨幣の形態への転換可能性にたいするもの(13)でしかない。それだからまた、||325| 恐慌の場合は別としても、割引によって資本を調達することと、貨幣請求権を一つの形態から別の形態に転換する [convert] こととのあいだには、大きな違いがあるのであ。(14)(9)(15)

- 1) 「パニックの逼迫 [a pressure of panic]」——オウヴァストンの証言では、「逼迫ないしパニック [a pressure or panic]」となっている。エンゲルス版は、マルクスのこの誤記をそのままドイツ語に訳している。
- 2) 「法貨 [the legal tender]」→「法定の支払貨幣」
- 3) 「() および ()」——削除。
- 4) 「信用の欠乏」Discredit→Kreditmangel
- 5) 「同時に」——削除。
- 6) 「等々」——削除。
- 7) 挿入——「自身」
- 8) 挿入——「満期になった」
- 9) 「彼らの有価証券がいかかわしい [faul]、等々のものであれば、あるいは」——削除。
- 10) 挿入——「自身」
- 11) ここにあるべき so は、草稿では sonst となっている。誤記か、nst の消し忘れてであろう。
- 12) 「需要」→「要求」
- 13) 「価値にとっての、商品または手形(債権)の形態から貨幣の形態への転換可能性にたいするもの」→「価値を商品または債権の形態から貨幣の形態へ転

換したいという願い」

- 14) 「割引によって資本を調達することと、貨幣請求権一つの形態から別の形態に転換する〔convert〕こととのあいだには、大きな違いがあるのである。」
→「資本の借入と割引とのあいだには大きな違いがあるのであって、割引は、ただ、貨幣請求権が一つの形態から別の形態に、すなわち現実の貨幣に、転換されるということを実現するだけなのである。」
- 15) エンゲルス版ではここに、エンゲルスによる次の長い挿入がある。

「[ここで私——編集者——に一言さしはさませていただきたい。

ノーマンの場合にもロイド-オウヴァストンの場合にも、銀行業者はつねに「資本を前貸しする」人としてそこにあり、彼の客は彼から「資本」を求めるとしてそこにある。すなわち、オウヴァストンは言う。ある人が銀行業者に手形を割引してもらうのは、「資本を手に入れたいと思うからであり」（第3729号）、また、もしこの人が「資本にたいする処分権を低い利率で手に入れることができる」（第3730号）ならば、それは彼にとって好都合である、と。「貨幣は、資本を手に入れるための道具であり」（第3736号）、また、パニックのときには、事業界の大きな願いは、「資本にたいする支配力を手に入れること」（第3743号）である。資本とはなんであるかについてのロイド-オウヴァストンのあらゆる混乱にもかかわらず、次のことだけは明らかである。すなわち、オウヴァストンは、銀行業者が取引客に与えるものを資本と呼ぶのであり、それは取引客がまだもっていなかった資本が前貸しされるものであって、取引客がこれまで支配していたものへの追加だ、と言うのである。

銀行業者は貨幣形態で利用することのできる社会的資本の分配者——貸付という形での——としての役割を演じることにあまりにも慣れているので、彼にとっては自分が貨幣を手放す場合のあらゆる機能が貸付のように思われるのである。彼が払い出す貨幣はすべて彼にとっては前貸として現われる。もし貨幣が直接に貸付に投じられるならば、これは文字どおりに正しい。貨幣が手形割引に投じられるならば、それはじっさい彼自身にとっては手形の満期までは前貸である。こうして彼の頭のなかでは、自分は前貸でないような支払はすることができないのだという観念が固まってしまうのである。しかも、その前貸というのは、けっして、利子または利潤をあげる目的でのどんな貨幣投下も、経済学的には、個人の資格でのその貨幣所有者が企業者の資格での自分自身に与える前貸とみなされる、というただそれだけの意味での前貸ではないのである。そうではなく、銀行業者が取引客にある金額を貸付の形で引き渡せば、取引客が自由に処分できる資本がそれだけふえる、という特定の意味での前貸なのである。

この観念こそは、銀行の帳場から経済学に移されて、あの厄介な論争問題、

すなわち、銀行業者が自分の取引客に現金貨幣で用立てるものは資本なのか、それともただの貨幣、流通手段、通貨なのか？ という問題と呼び起こしたものである。この——根本的には簡単な——論争問題を解決するためには、われわれは銀行の取引客の立場に自分を置いてみなければならない。問題は、この取引客はなにを求めてなにを手に入れるのか、ということである。

もし銀行が取引客にただ彼の個人的信用だけで彼のほうからの担保の提供なしに貸付を承諾するとすれば、事柄は明白である。彼は、無条件に、一定の価値額の前貸を、彼の従来の充用資本への追加として受け取るのである。彼はこの前貸を貨幣形態で受け取る。つまり、ただ貨幣を受け取るだけでなく、貨幣資本をも受け取るのである。

もし彼が有価証券などを担保として前貸を受けるとすれば、それは、返済を条件として彼に貨幣が支払われたという意味での前貸である。しかし、資本の前貸ではない。なぜならば、その有価証券もやはり資本を表わしており、しかも前貸よりも大きい額を表わしているからである。つまり、受領者は自分が担保として提供するよりも少ない資本価値を受け取るのである。これは彼にとってはけっして追加資本の取得ではない。彼がこの取引をするのは、資本が必要だからではなく——資本ならば彼は自分の有価証券をもっているのだ——、貨幣が必要だからである。だから、ここには貨幣の前貸はあるが、資本の前貸はないのである。

前貸が手形の割引によって与えられるならば、前貸という形態も消えてしまう。そこにあるのは純粋な売買である。手形は裏書によって銀行の所有に移り、そのかわりに貨幣は客の所有に移る。客のほうからの返済は問題にならない。客が手形や類似の信用手段で現金貨幣を買うとすれば、それが前貸でないことは、彼がそのほかの自分の商品、たとえば綿花や鉄や穀物で現金貨幣を買う場合と少しも違わない。そして、このような場合には資本の前貸などとはぜんぜん言えないのである。商人どうしのあいだの売買はすべて資本の移転である。そして、前貸が現われるのは、ただ、資本の移転が相互的ではなく、一方的であり期限つきである場合だけである。だから、資本前貸が手形割引によって行なわれることができるのは、ただ、その手形がけっして売られた商品を表わしていない融通手形である場合だけであるが、こんな手形はその正体がわかればどんな銀行業者も受け取らないのである。だから、通例の割引取引では銀行の客は資本でも貨幣でも前貸を受けるのではなく、売った商品と引き換えに貨幣を受け取るのである。

このように、客が銀行に資本を求めてそれを受け取る場合は、彼がただ貨幣を前貸してもらおうとか銀行で買うとかいう場合とは非常にはっきり違っているのである。しかも、ことにロイド-オウヴァーストン氏は自分の資金を担保なし

ではめったに前貸しないのが常だったから（彼はマンチェスターの私の商会の取引銀行業者だった）、寛容な銀行業者が資本の不足に困っている工場主に多額の資本を前貸するのだという彼のりっぱな陳述がひどいてたらめだということも、同様に明らかである。

なお、第32章でもマルクスは要点では同じことを述べている。「支払手段にたいする需要は、商人や生産者が確実な担保を提供できるかぎりでは、たんなる、貨幣への転換可能性にたいする需要である。そうでないかぎりでは、それは貨幣資本にたいする需要である。すなわち、支払手段の前貸が彼らにただ貨幣形態を与えるだけではなく、どんな形態にあるものであろうと彼らに不足している支払のための等価物をも与えるかぎりでは。」¹⁶⁾——さらに第33章では次のように言う。「発展した信用制度のもとでは貨幣は銀行の手に集中されているのであって、ここでは、少なくとも名目的には、貨幣を前貸する者は、銀行である。この前貸は、流通のなかにある貨幣に関係があるだけ¹⁷⁾である。それは通貨の前貸であって、それが流通させる諸資本の前貸ではない。」¹⁸⁾——このことを知っているにちがいないチャップマン氏も、割引取引についての前述の見解を確認している。『銀行委員会』、1857年。「銀行業者は手形をもっている。銀行業者は手形を買ったのである。」証言。質問第5139号。

なお、われわれは第28章で、もう一度このテーマに立ち返る。——F. エンゲルス}」

- 16) 【注15)への注】 この箇所は、草稿では358ページにあり、次のようになっている。——「支払手段にたいする需要は、商人や生産者が確実な担保を提供できるかぎりでは、たんなる、貨幣への転換可能性 [convertibility] にたいする需要である。連中 [Kerls] が真正な種 [bona fide Quelle] をもっていないかぎりでは、それは貨幣資本 [monied Capital] にたいする需要である。すなわち、支払手段の前貸が彼らにただ貨幣形態を与えるだけではなく、どんな形態にあるものであろうと彼らに不足している支払のための等価物をも与えるかぎりでは。」
- 17) 【注15)への注】 「あるだけ [nur]」——1894年版では、「ない [nicht]」となっている。現行版では脚注で訂正されている。
- 18) 【注15)への注】 この箇所は、草稿の362ページにあり、次のようになっている。——「発展した信用制度のもとでは貨幣は銀行の手に集中されているのであって、ここでは、少なくとも（名目的には）貨幣を前貸する者は、銀行である。この前貸は、流通のなかにある貨幣に関係があるだけである。それは通貨の前貸であって、それが流通させる諸資本の前貸ではない。」なお、この部分を含む1パラグラフは、拙稿「『資本論』第3部第5篇の草稿について」、『信用理論研究』第1号、1984年7月、21—22ページで紹介しているので、参

照されたい。

「第3744号。あなたが「資本」¹⁾という言葉で実際になにを考えておられるのか、述べていただけませんか？——²⁾資本は、事業を営むために用いられているいろいろな商品から成っています。固定資本があり、また流動資本があります。皆さんの船、皆さんのドック、皆さんの埠頭など³⁾は固定資本であり、皆さんの食糧、皆さんの衣類などは流動資本です。」（「資本」のなんとという深い洞察！ また、貨幣逼迫の時期に割引させる人々は、自分の食糧、衣類などを買うことができない人々であって、彼らは食糧や衣類を求めており、しかも皆さんのドックや埠頭を求めているのだとは、なんとという恥知らずか！）⁴⁾

1) 「「」および「」」——削除。

2) 挿入——「{オウヴァストンの答え。}」

3) 「など」——削除。

4) 「（「資本」のなんとという深い洞察！ また、貨幣逼迫〔money pressure〕の時期に割引させる人々は、自分の食糧、衣類などを買うことができない人々であって、彼らは食糧や衣類を求めており、しかも皆さんのドックや埠頭を求めているのだとは、なんとという恥知らずか！）」——削除。

「第3745号。地金の流出¹⁾で、この国²⁾は苦しめられるでしょうか？——その言葉になにか合理的な意味があるかぎりでは、そういうことはありません。〔〕（そして³⁾次に、古いリカードウ的ばかばなし⁴⁾が出てくる。）〔「〕……事物の自然的な状態にあっては、世界の貨幣は世界のさまざまな国のあいだにある割合で配分されます。この割合は、⁵⁾このような配分のもとでは⁶⁾どの一国⁷⁾とその他の世界のすべての他の国々を一緒にしたもの⁸⁾とのあいだの交易がバーター交易⁹⁾になるようなぐあいになっています。ところが、このような配分に影響を与える攪乱的な事情¹⁰⁾が¹¹⁾生じるもので、もしこのような事情¹²⁾が生じるときには、どこかのある国の貨幣の一定の部分が他の諸国に渡って行くのです。」¹³⁾

- 1) 「地金の流出」→「外国への金の流出」
- 2) 「この国」→「イギリス」
- 3) 「そして」——削除。
- 4) 「ばかばなし〔Scheisse〕」→「貨幣理論」
- 5) 挿入——「〔貨幣の〕」
- 6) 挿入——「一方での」
- 7) 「他方での」——削除。
- 8) 「一緒にしたもの〔jointly〕」——削除。
- 9) 「バーター交易〔an intercourse of barter〕」→「たんなる物物交換」
- 10) 「事情〔circumstances〕」→「影響」
- 11) 挿入——「ときどき」
- 12) 「事情」→「影響」
- 13) エンゲルス版（1894年版）では、ここで改行されていない。

第3746号。「閣下はいま、「貨幣」という言葉を使っておられます。まえには閣下は、それは資本の損失だと言われたと思いましたが。——なにを資本の損失だと言いましたか？ 第3747号。地金の輸出¹⁾です。——いや、そうは言いませんでした。もしあなたが地金²⁾を資本とみなすのであれば、それは疑いもなく資本の損失です。それは、世界の貨幣を構成している貴金属のある部分を手放すことです。³⁾

- 1) 「地金の輸出」→「金の流出」
- 2) 「地金」→「金」
- 3) エンゲルス版（1894年版）では、ここで改行されていない。

第3748号。前に閣下は、割引率の変動は資本の価値の変動のたんなる兆候だと言われたと思いませんか？——そう言いました。第3749号。また、割引率は一般にイングランド銀行の地金の貯蔵¹⁾の状態といっしょに変動する、と言われたと思いますが？——はい。しかし、前にも言ったように、一国の貨幣の量〔 〕〔つまり彼は²⁾この言葉で地金³⁾の量のことを言っているのである〕〔 〕の変動から生じる 利子率の変動はごくわずかです、云々。〔 〕

- 1) 「地金の貯蔵」→「金準備」
- 2) 挿入——「ここでは」
- 3) 「地金」→「現実の金」

第3750号。「では、閣下がおっしゃりたいのは、割引率がふだんよりも 継続的に、といっても一時的に上昇する場合に、それまでよりも資本が減少するのだ、ということなのですか？——減少といっても、この言葉の一つの意味においてです。資本〔 〕¹⁾ {²⁾それはまさに貨幣または地金³⁾ だったのである} {⁴⁾しかもそれは⁵⁾ さきほどは⁶⁾、⁷⁾事業の、資本の縮小からではなくその拡張から生じた「高い利潤率」であった⁸⁾} [「 〕とそれにたいする需要との割合が変動したわけです。⁹⁾それは、おそらく需要の増加によってであって、資本の量の減少によってではありません。

- 1) 以下の角括弧での挿入は、エンゲルス版では、この第3750号からの引用のあとにつけられている。
- 2) 挿入——「しかし」
- 3) 「貨幣または地金 [money od. bullion]」→「イコール貨幣または金」
- 4) 「である」〔 →「であり、」なお、最後の「{」は、草稿では「(」となっている。
- 5) 「それは」——削除。
- 6) 「さきほどは [vorhin]」→「少し前では [noch etwas früher]」
- 7) 挿入——「利率の上昇が、」
- 8) 「であった」→「によって説明された」
- 9) 挿入——「しかし」

第3751号。あなたがとくにほのめかしておられる [allure] 資本とは、なんなのですか？——それはまったく、各人が必要とする資本はなにか、ということによります。それは、国民がその事業を続けて行くために自由にできる資本であって、もしこの事業が2倍になれば、それを運営していくために必要な資本にたいする需要が大きく増加せざるをえないのです。〔 〕 {このいやらしい¹⁾ 銀行業者は、まず事業を2倍にしておき、²⁾そのあとで、当座必要とする³⁾ 資本にたいする需要を2倍にするのだ。彼がか

かわる⁴⁾「取引先」⁵⁾とはつねに⁶⁾、自分の事業を2倍にするためにロイド⁷⁾から「⁸⁾前よりも大きな資本量」⁸⁾を調達する⁹⁾人々なのである。〔「¹⁰⁾資本は、他のどの商品とも同じようなものです。〔 〕〕（それどころか資本はまさに諸商品の総体だったのであり、それと異なるものではなかったのだ。¹¹⁾）〔「 〕 資本は、需要供給に応じて、価格が変動するものです。〔 〕〕〔だから商品は、¹²⁾商品としてと¹³⁾資本としてと、二重に価格が変動するわけだ。〕

- 1) 「いやらしい [lausig]」→「ずるい [piffig]」
- 2) 挿入——「それから」
- 3) 「当座必要とする [to carry it on with]」→「事業を2倍にするための」
- 4) 「かわる」→「見ている」
- 5) 「「取引先 [Geschäftsfreund]」」→「顧客」
- 6) 挿入——「ただ」
- 7) 挿入——「氏」
- 8) 「「 〕 および 「 〕 」 ——削除。
- 9) 「調達する [raise]」→「求める」
- 10) 「——」 ——削除。
- 11) 「それどころか資本はまさに諸商品の総体であって、それと異なるものではなかったのだ。」→「しかし、それどころか資本は、このロイド氏によれば、まさに諸商品の総体以外のなものでもないのである。」
- 12) 挿入——「一度は」
- 13) 挿入——「もう一度は」

〔「 〕 第3752号。割引率の変化は、一般的には、イングランド銀行の金庫にある金の量の変化に関連しています。この金は閣下の言われる資本なのですか？¹⁾——そうではありません。〕²⁾

- 1) 「なのですか？ [Is it... ?]」——このうちの Is は、草稿では誤って It となっている。
- 2) エンゲルス版（1894年版）では、ここで改行されていない。

〔「 〕 第3753号。閣下は、イングランド銀行に資本の大きな貯蔵 [store] がありながら同時に割引率が高かったという実例をあげることができます

か？——イングランド銀行は資本の保管 [deposit of capital] のための場所ではありません。それは貨幣の保管 [deposits of money] のための場所なのです。¹⁾

1) エンゲルス版(1894年版)では、ここで改行されていない。

第3754号。閣下は、利子率は資本の量によって決まる、と述べられました。あなたの言われる資本とはなにか、また、イングランド銀行に地金の大きな貯蔵¹⁾があったのに同時に利子率が高かったという例をあげることができるかどうか、お述べくださいませか？——イングランド銀行での地金の蓄積が低い利子率と同時に生じるということは、非常にありそうなことです。[「」] (なるほど!) [「」] なぜならば、資本 [「」] {つまり貨幣資本 [monied capital] のこと。²⁾1844年、1845年は繁栄期 [Prosperity times] であった。} [「」] にたいする需要が減少した時期は、もちろん資本を支配するための手段または用具を蓄積することのできる時期なのです。³⁾

1) 「地金の貯蔵 [store]」 → 「金準備」

2) 挿入——「ここで語られている時期、すなわち」

3) エンゲルス版(1894年版)では、ここで改行されていない。

第3755号。では、割引率とイングランド銀行の金庫にある地金¹⁾の量とのあいだにはなんの関連もないと思われるのですか？——関連はあるかもしれませんが、それは原則上の関連ではありません。[「」] (他方で²⁾彼の銀行法は、イングランド銀行にある地金³⁾の量に応じて利子率を調節するということ⁴⁾を⁵⁾イングランド銀行の原則としているのである。)[「」] 時間的に同時に生じることはあるかもしれません。⁶⁾

1) 「地金」 → 「金」

2) 「他方で」 → 「ところが」

3) 挿入——「1844年の」

4) 「地金」 → 「金」

5) 挿入——「まさに」

6) エンゲルス版(1894年版)では、ここで改行されていない。

第3758号。では、閣下は、逼迫 [pressure] の状態のもとでは割引率が
高いためにこの国の商人がおちいる困難は、資本を手に入れることにある
のであって、貨幣を手に入れることにあるのではない、と言われていると
解してよろしいのでしょうか?—あなたは二つのものをいっしょにして
いますが、私はそれをそういうかたちでいっしょにしているではありません。
彼らの¹⁾ 困難は資本を手に入れることにありますが、彼らの²⁾ 困難
はまた、貨幣を手に入れることにもあるのです。……貨幣を手に入れるこ
との困難と、資本を手に入れることの困難とは、同じ困難をその進行の二
つの続いて生じる³⁾ 段階で見たものです。」ここで魚はまたもや動きがと
れない。第1の困難は、手形を割引させること (⁴⁾または有価証券担保の
前貸⁵⁾を受けること)⁴⁾である。それは、資本を、または資本の商業的代
理物⁶⁾を、貨幣に転換する [convert] ことの困難である。そして、この
困難は、ほかの困難を度外視すれば⁷⁾、高い利率に表現される。しかし、
貨幣を受け取って⁸⁾しまえば、⁹⁾第2の困難はどこにあるのか? 支払だけ
が問題ならば、貨幣を支払うこと¹⁰⁾にどんな困難があるだろうか? また、
買うことが問題ならば、そのような逼迫¹¹⁾の時期に買うことになにか困難
があったなどということ聞いた人があるだろうか¹²⁾? それに¹³⁾、かり
にこれが穀物、綿花、等々が騰貴している特別な場合のことだと仮定すれ
ば¹⁴⁾、この困難は、「貨幣の価値」¹⁵⁾に、すなわち利子¹⁶⁾に現われるので
はなく、ただ商品の価格に現われることができるだけのはずである。しか
し¹⁷⁾このような困難ならば、彼¹⁸⁾が今では商品を買うための貨幣をもっ
ているということによって、克服されているではないか。

1) 「彼らの」——削除。

2) 「彼らの」——削除。

3) 「続いて生じる [successive]」→「違った [verschieden]」

- 4) 「(」および「)」——削除。
- 5) 「有価証券担保の前貸 [a loan on security]」→「商品担保の前貸」
- 6) 「商業的代理物 [a commercial representative]」→「商業的価値章標」
- 7) 「ほかの困難を度外視すれば [v. anderem abgesehen]」→「とりわけ」
- 8) 「受け取って」erhalten→empfangen
- 9) 挿入——「次には」
- 10) 「支払うこと [paying]」→「手放すこと [loswerden]」
- 11) 「逼迫 [pressure]」→「恐慌」
- 12) 「なにか困難があったなどということを聞いた人があるだろうか」→「困難を感じた人がどこにあらうか」
- 13) 「それに [übrigens]」→「また [und]」
- 14) 「すれば」→「しても」
- 15) 「『貨幣の価値 [the value of the money]』」→「貨幣資本の価値」
- 16) 「利子」→「利子率」
- 17) 「しかし」→「そして」
- 18) 「彼」→「この人」

〔「〕第3760号。しかし、割引率が高くなるということは、貨幣を手に入れることの困難が増すことでしょう？——それは貨幣を手に入れることの困難が増すことですが、しかしそれは、貨幣をもちたいと思うからでは
ありません。〔「〕（それはまさに、だれかが自分の商品を売るのは、貨幣
《を》もてあそびたいからではないのと同様である。なんという英知か！）¹⁾
〔「〕それはただ、資本を手に入れる困難の増大〔「〕〔これが商業的な借金
の困難が増大したということを意味している場合でさえ、この困難の増大
は、ただ貨幣または信用資本にたいする需要の増大であるにすぎない。〕²⁾
〔「〕が、洗練された〔civilised〕状態の複雑な諸関係に従って現われて
くるときの形態〔「〕〔そしてこの形態が銀行業者のポケットのなかには
いっていく³⁾のである。〕〔「〕にすぎません。〔「〕（！）（たわごと！）⁴⁾⁵⁾
〔「〕第3763号。⁶⁾銀行業者は、一方では預金を受け入れ、他方では||325
a|この預金を資本の形態で⁷⁾……人々⁸⁾の手に任せることによってそれ
を充用する仲介者です。〕

/325a/ イングランド銀行の割引率。地金。銀行券。

1844年	<u>公衆保有銀行券</u>	<u>準備高</u>	<u>地 金</u>	<u>最低利率</u>	利子は、1844年末まで全体として2½%のままだった。最高は3%を超えなかった。		
	9月7日 £ 20,176,000	8,175,000	£15,315,000 ¹⁾	2½%			
1844年12月28日：公衆保有銀行券 £ 19,123,000 <u>準備高</u> £ 9,077,000 <u>地金</u> 14,878,000							
イングランドおよびウェールズの <u>総流通高</u> （イングランド銀行外の）：1844年9月：£ 7,051,482 ²⁾ として1844年12月：7,694,081 ³⁾							
1845年					<u>国内流通高</u>	12月には（そして11月にもすでに）〔利率〕の最低が3%、最高が5%となっている。	
	1月4日 £ 19,669,000	8,418,000	14,802,000	2½%	7,486,316		
しかし、地金も11月には、11月1日の£ 13,855,000から11月29日の£ 13,237,000へと下落しつつある。12月初め、13,067,000、そして月末はふたたび、13,326,000。							
11月初め、公衆保有銀行券、22,047,000、準備高、5,220,000。							
12月初め、公衆〔保有銀行券〕、£ 20,595,000、準備高、5,946,000。							
12月末、公衆〔保有銀行券〕、£ 19,857,000、準備高、6,915,000。							
私的預金は1月4日に8,037,320だった。11月（初め）、9,099,737。11月末、8,992,719。12月初め、9,022,019。12月末、8,482,293 ⁴⁾ 。							
1846年	<u>公衆保有銀行券</u>	<u>準備高</u>	<u>地 金</u>	<u>最低率</u>	<u>私的預金</u>	<u>私的証券</u>	
	1月3日 £ 20,257,000	6,419,000	13,281,000	3½%	8,350,465	16,262,593	
しかし、利率は〔最高〕5%にまで変化し、また〔8月22日までは〕ときどき3½%にまで下がる。地金は、ほぼ1400万とほぼ1500万とのあいだで変動する。							
その他証券は、1250万と2300万とのあいだで変動する。準備高は、500万とほぼ1000万とのあいだで変動する。							
1847年	<u>公衆保有銀行券</u>	<u>準備高</u>	<u>地 金</u>	<u>最低率</u>	<u>その他証券</u>	<u>私的預金</u>	1月から4月まで、最低率4%。 利子は4月に5%から7%にまで揺れる。 利子は、10月までに8%に上昇。10月30日、準備高は100万を少し超過、 <u>地金</u> は800万超。
	1月2日 £ 20,031,000	8,227,000	14,952,000	3%	15,071,820	7,903,959	
	<u>1月16日</u> £ 20,679,000	6,546,000	13,949,000	3½%	14,450,711	10,339,726	
	4月10日 £ 20,403,000	2,833,000	9,867,000	5%	18,136,377	11,257,744	
<u>4月17日</u> £ 20,243,000	2,558,000	9,330,000	7%まで ⁵⁾	17,111,001	10,004,699		
1848年	<u>公衆保有銀行券</u>	<u>準備高</u>	<u>地 金</u>	<u>最低率</u>	<u>その他証券</u>	<u>私的預金</u>	
	<u>1月1日</u> £ 17,925,000	7,866,000	12,404,000	5%	16,989,221	8,523,108	
	<u>1月29日</u> £ 19,142,000	7,640,000	13,390,000	4%	14,321,905	10,768,087	
	12月 ⁶⁾ 17日 £ 17,377,000	9,975,000	14,169,000	3½%	11,148,869	9,157,381	
11月4日 £ 18,554,000	8,243,000	13,408,000	3%	10,805,561	10,795,395		
1849年	<u>公衆保有銀行券</u>	<u>準備高</u>	<u>地 金</u>				
	1月6日 £ 17,250,000	10,985,000	15,025,000	3%	10,825,470	8,814,702	
	<u>11月24日</u> £ 17,999,000	11,571,000	16,380,000	2½%	9,660,032	9,456,116	

年	公衆保有銀行券	準備高	地金			
1850年	1月5日 £ 18,257,000	12,011,000	17,020,000	2½	11,691,026	9,735,268
	12月28日 £ 18,574,000	9,778,000	14,964,000	3	14,459,608	9,147,039
1851年	1月4日 £ 19,037,000	9,236,000	14,830,000	2½ ⁷⁾	15,181,698	9,480,319
	9月6日 £ 19,363,000	8,344,000	14,290,000	3%	13,193,878	8,121,431
1852年	1月3日 £ 19,285,000	11,707,000	17,558,000	2½	12,214,222	9,371,117
	4月10日 £ 21,208,000	11,256,000	19,245,000	2%	11,225,844	13,992,932
	8月14日 £ 22,953,000	12,667,000	21,926,000	2%	10,740,159	13,088,533
	12月24日 £ 22,226,000	11,846,000	20,749,000	2%	14,135,952	12,264,343
1853年	1月8日 £ 23,361,000	9,809,000	19,766,000	2½%	15,025,553	14,310,648
	1月23日 ⁸⁾ £ 23,474,000	9,444,000	19,405,000	3%	14,170,745	13,727,637
	6月4日 £ 23,423,000	8,367,000	18,254,000	3½	14,632,359	12,902,839
	9月3日 £ 22,466,000	7,697,000	16,500,000	4%	14,546,194	11,017,313
	9月17日 £ 22,422,000	6,977,000	15,862,000	4½	16,740,682	11,053,973
	10月1日 £ 22,773,000	6,259,000	15,613,000	5	12,339,083 ⁹⁾	11,885,565
1854年	1月7日 £ 21,348,000	7,801,000	15,831,000	5	16,736,409	12,744,634
	5月13日 £ 21,144,000	4,713,000	12,589,000	5½	15,144,039	10,587,010
	12月2日 £ 19,617,000	7,627,000	13,870,000	5	13,710,468	9,759,246
1855年	1月6日 £ 19,682,000	7,307,000	13,667,000	5	15,481,228	9,981,364
	4月7日 £ 19,812,000	8,580,000	15,079,000	4½	13,655,995	11,396,875
	6月16日 £ 19,586,000	11,814,000	18,061,000	3½	12,399,704	13,307,714
	9月8日 £ 20,142,000	7,526,000	14,270,000	4	16,637,227	10,970,353
	9月15日 £ 19,713,000	7,397,000	13,698,000	4½	17,388,784	11,146,762
	9月29日 £ 20,173,000	6,195,000	12,939,000	5	19,915,763	11,437,955
	10月6日 £ 20,292,000	5,473,000	12,279,000	5½	19,761,293	10,837,643

¹⁰⁾ こうして10月末には5½%が続いている。
11月と12月には、60日以下にたいして6%、
60日超95日未満にたいして7%。
12月29日 銀行券 18,701,000
準備高 5,964,000
地金 10,820,000 |

1856年	公衆保有銀行券	準備高	地金	最低利子率	私的証券	私的預金
1月5日	£ 18,901,000	5,520,000	10,537,000	60日以下 6% 60日超95日未満 7%	19,871,874	12,607,840
2月2日	£ 19,122,000	5,412,000	10,706,000	同上	18,216,497	13,807,258
3月1日	£ 18,935,000	5,493,000	10,600,000	同上	19,490,762	13,918,279
4月5日	£ 19,445,000	4,470,000	10,057,000	同上	19,711,720	11,510,329
5月10日	£ 19,943,000	3,691,000	9,779,000	同上	15,297,277	10,613,914
5月24日	£ 19,332,000	5,082,000	10,559,000	6%	15,377,046	11,472,481
5月31日	£ 19,554,000	5,689,000	11,385,000	5	14,042,418	10,745,271
6月28日	£ 19,515,000	7,389,000	13,074,000	4½	14,803,958	9,810,045
10月4日	£ 20,926,000	3,776,000	10,784,000	5	21,582,464	10,323,552
10月11日	£ 20,543,000	3,521,000	10,140,000	60日 6% 60日超~95日 7%	21,049,117	9,848,912
11月8日	£ 20,239,000	3,152,000	9,530,000	60日 6% 60日超 7%	18,626,428	9,652,655
12月6日	£ 19,195,000	5,151,000	10,486,000	6½	17,389,715	9,297,193
12月20日	£ 18,513,000	5,864,000	10,514,000	6	17,654,460	9,493,093

連中〔D. Kerls〕は1847年には、以前の7%に代えて、9%の配当を与え、そのうえ各1%のボーナスを2度与えた。そして1857年には11%を。¹¹⁾

〔銀行法特別委員会〕報告書、1857年、第2部、付録、を見よ。/

- この数字は8月31日のものであり、9月7日は£15,209,000である。
- この数字は1843年のものであり、1844年は£7,496,859である。
- この数字も1843年のものであり、1844年は£7,529,401である。
- この数字は、8,482,239の誤記である。
- 「7%」は、最高率である。最低率は5%であった。
- 「12月」は「6月」の誤記である。
- この数字は、3%の誤記である。
- 「23日」は「22日」の誤記である。
- この数字は「政府証券」のものであり、私的証券は£19,124,799である。
- 右の欄外に書かれた以下の部分は、このページ（325aページ）が一杯になってしまったために、このようなかたちでその続きを書いたものであって、注記ではない。
- クラバム『イングランド銀行—その歴史—』によると、1847—1848年には、各半期4½%の配当が支払われており、ここでの「9%」と一致している。しかし、「そのうえ各1%のボーナスを2度与えた〔ausserdem 2 Bonusse v. je 1%〕」という事実は確認できなかった。この前年の各半期3½%にさらに1%を追加したことを勘違いしたものであろうか。また、1857年についても、クラバムの表では、前期4½%、後期5½%で、合計10%であり、ここでの「11%」という数字と合致しない。(Cf. Sir John Clapham, "The Bank of England", vol. 11, p. 204 and 428.) なお、マルクスが配当にかんするこれらの数字をどこからとったのかはわからなかった。

- 1) 「(それはまさに、だれかが自分の商品を売るのは、貨幣《を》もてあそびたいからではないと同様である。なんという英知!)」——削除。
- 2) 「[これが商業的な借金の困難が増大したということを意味している場合でさえ、この困難の増大は、ただ貨幣または信用資本にたいする需要の増大であるにすぎない。]」——削除。
- 3) 「はいっていく」→「利潤をもたらす」
- 4) 「(!)(たわごと [Humbug] !)」——削除。
- 5) エンゲルス版ではここで改行されているが、行頭にあたるだけで、改行とはみえない。
- 6) 挿入——「{オウヴァストンの答え。}」
- 7) 「資本の形態で」——エンゲルス版でも強調されている。
- 8) 「……人々」——原文では persons etc. であり、オウヴァストンの証言で persons, who he thinks will make a good use of it となっているところの who 以下を etc. としているわけである。エンゲルス版ではこの箇所は Personen, welche etc. となっているのであって、このことから、エンゲルスは、この部分を編集しているとき、少なくとも部分的には証言の原文をも参照していたことがわかる。

ここでようやく、彼が¹⁾ 資本ということ でなにを考えているかがわかった。彼は「貨幣を任せる」ことによって貨幣を資本に転化させるのであるが、これは、利子を取って貸し出すことの婉曲な表現なのである。^{2)/3)}

- 1) 「彼が」——エンゲルス版でも強調されている。
- 2) 「彼は「貨幣を任せる」ことによって貨幣を資本に転化させるのであるが、これは、利子を取って貸し出すことの婉曲な表現なのである。」→「彼は、貨幣を「任せる」ことによって、もっと婉曲にでなく言えば、利子を取って貸し出すことによって、貨幣を資本に転化させるのである。」
- 3) 草稿では、325 a ページのこれ以下の部分に、「イングランド銀行の割引率。地金。銀行券。」というタイトルの表が書かれており、それはさらに325 b ページにまで続いている。本稿ではこの表は折込みとして収録する。この表の前の本文に続く本文は、325 b ページの表の下に書かれている。なお、草稿の表には、多くの不必要な横線が引かれているが、見やすくするためにかなり削った。

/325 b/ 前ロイド¹⁾氏はまえに、[イングランド銀行の]地金の額(または貨幣の量)[の変化]の結果としての割引率の変化は、ただ同時に生

じているだけであって、本質的な関連にあるわけではない²⁾と言ったが、そのあとでまた彼は次のように繰り返している。

- 1) 「前ロイド」→「オウヴェストン」
- 2) 「〔イングランド銀行の〕地金の額（または貨幣の量）〔の変化〕の結果としての割引率の変化は、ただ同時に生じている〔coincident〕だけであって、本質的な関連にあるわけではない」→「割引率の変化はイングランド銀行の金準備額または貨幣の現存量の変化とは、本質的な関係にあるのではなく、せいぜい同時性の関係にあるだけだ」

第3805号¹⁾。「国内の貨幣が流出によって減らされれば、その価値は増加するのであって、イングランド銀行はこのような貨幣の価値の変動に〔 〕（つまり資本としての²⁾貨幣の価値の変動に³⁾——というのは、貨幣の価値（正しい意味での）は同じままなのだから⁴⁾）〔「 〕従わなければなりません。このことが、専門用語〔technical term〕では、利子率を引き上げる、というように言い表わされるのです。』⁵⁾

- 1) 「第3805号」——草稿では、「第3804号」と誤記されており、1894年版でもそのままになっていたが、現行版では訂正されている。
- 2) 「資本としての」——エンゲルス版でも強調されている。
- 3) 挿入——「換言すれば利子率の変動に、」
- 4) 「貨幣の価値（正しい意味での）は同じままなのだから」→「商品と比べての、貨幣としての貨幣の価値は、同じままなのだから」
- 5) 「 〕」——草稿では、「 ）」となっている。

第3819号。「私は用語を¹⁾ けっして混同してはいません。」（つまり貨幣と資本とを混同していないというのであるが、それは、彼がこの二つをけっして区別していないという²⁾理由からである。）{だから、商品が資本の形態であるかぎりでは、そして商品が売買ではたんに商品であるかぎりでは、資本と商品とについて逃げ口上を言うことができるであろう。』³⁾

- 1) 「用語を」→「その二つを」
- 2) 挿入——「簡単な」
- 3) 「{だから、商品が資本の形態であるかぎりでは、そして商品が売買ではた

んに商品であるかぎりでは、資本と商品とについて逃げ口上を言うことができるであろう。」——削除。この最後の部分は、<資本と商品とについて同じような混同をし、そしてそれについて同じような逃げ口上を言うことができるであろう>、という意味であろう。

第3834号。「この国の必要生活資料の供給のために〔 〕(1847年に穀物のために)〔「 〕支払われなければならなかった、そして実のところは資本だった¹⁾非常に大きな金額。」

1) 「実のところは資本だった」——エンゲルス版でも強調されている。

第3841号、「割引¹⁾率の変動は疑いもなく準備高²⁾の状態と非常に密接な関係があります。なぜならば、準備高の状態は国内にある貨幣量の増減の指標だからです。そして、国内にある貨幣が増加または減少するのに比例して、その貨幣の価値は増加または減少し、また〔イングランド〕銀行割引率はそれに従うでしょう。」³⁾

1) 「割引」——草稿では「準備」と誤記されている。

2) 「準備高 [reserve]」→「〔イングランド銀行の〕金準備」

3) 挿入——「——つまり、ここで彼は、第3755号できっぱりと否定したことを是認するのである。」

第3842号。「両者」(地金の状態と準備の状態と)¹⁾「のあいだには密接な関連があります²⁾。〔 〕³⁾ここでは彼は、利子率の変化を「⁴⁾貨幣の量」⁴⁾《の変動》から説明している。しかしながら、彼はほうそをついている⁵⁾。なぜなら、国内の貨幣⁶⁾が増加することから準備高が減少する、ということはありうるからである⁷⁾。これは、公衆の手にある銀行券が増加し、かつ地金⁸⁾が減少しない場合である。しかしその場合には、利子⁹⁾が上がる。なぜならば、その場合、イングランド銀行の銀行業資本〔banking Capital〕¹⁰⁾は《1844年の》法律によって制限されているのだからである。彼はこのことを口にする必要がない。というのは、勘定の変化を通じて¹¹⁾¹²⁾二つの部に共通するところはほとんどなにもないからである。¹³⁾ たとえば、

《1856年》5月10日

公衆の手に			
ある銀行券	19, 943, 000	貨幣	29, 722, 000
準備高	3, 691, 000	銀行券（準備外の）および地金	
地金	9, 779, 000		

1856年10月11日——この日、利子は5%から6および7%に上昇した（最低〔割引率〕が引き上げられた）。

公衆の手に			
ある銀行券	20, 543, 000	貨幣	30, 683, 000
準備高	3, 521, 000		
地金	10, 140, 000		

〔 〕

- 1) 「〔地金の状態と準備高の状態と〕」→「発券部にある金の量と銀行部にある銀行券の準備の量との」
- 2) 「あります」→「生じます」
- 3) 「(」——削除。
- 4) 「(」および「)」——削除。
- 5) 「彼はうそをついている」→「彼が言っていることはまちがいである」
- 6) 「貨幣」→「流通貨幣」
- 7) 「なぜならば、……からである」——削除。
- 8) 「地金」→「金属の蓄蔵」
- 9) 「利子」→「利子率」
- 10) 「銀行業資本 [banking Capital]」→「銀行資本 [Bankkapital]」
- 11) 「勘定の変化を通じて [durch d. change im account]」←「この法律によれば」
- 12) 挿入——「銀行の」
- 13) 以下、「たとえば」から2つの表の終わりまでは、エンゲルス版では削除されている。

「第3859号。高い利潤率はいつでも資本にたいする大きな需要を生みだ

すでしょう。資本にたいする大きな需要は資本の価値を高くするでしょう。」ここでようやく、¹¹「²高い利潤率」²と「³資本にたいする需要」³とのあいだの関連がわかった。ところで、《たとえば》1844—45年には綿工業では利潤率が高かった⁴が、それは、綿花が廉価であって、その価格が上がらなかったから⁵である。つまり、資本（そして前に出てきた陳述によれば、資本とは⁶、各人が自分の事業で必要とするものことである）の価値、すなわち⁷綿花の価値は、紡績業者⁸にとっては高くされなかったのである。さらに、綿花取引での利潤は製造業者に⁹自分の事業の拡張のために貨幣を借り入れる¹⁰きっかけを与えたかもしれない。それゆえ、増大した彼の需要は「貨幣資本 [monied capital]」にたいするものだったのであり、それ以外のなにものでもなかったのである。¹¹

- 1) 挿入——「オウヴァストンが考えている」
- 2) 「¹」および「²」——削除。
- 3) 「¹」および「²」——削除。
- 4) 「利潤率が高かった」→「高い利潤率が一般的だった」
- 5) 「綿花が廉価であって、その価格が上がらなかったから」→「綿製品にたいする需要が大きかったのに原綿が安かったからであり、また安いままだったから」
- 6) 「資本とは」→「オウヴァストンが資本と呼ぶのは」
- 7) 挿入——「ここでは」
- 8) 「紡績業者」→「製造業者」
- 9) 「綿花取引での利潤は製造業者に」→「高い利潤率は多くの綿製品製造業者に」
- 10) 「借り入れる」pumpen→aufnehmen
- 11) 「それゆえ、増大した彼の需要は「貨幣資本 [monied capital]」にたいするものだったのであり、それ以外のなにものでもなかったのである。[Seine Nachfrage stieg daher f. „monied capital“ u. nothing else.]」→「これによって増大したのは、貨幣資本にたいする彼の需要であって、それ以外のなににたいする需要でもなかったのである。[Dadurch stieg seine Nachfrage für Geldkapital und für sonst nichts.]」

第3889号。「地金¹¹が貨幣であることもないこともありうるのは、ちょ

うど、紙が銀行券であることもないこともありうるようなものです。」

1) 「地金」→「金」

第3896号。「では、閣下は、ご自分が1840年に用いられた論拠、つまりイングランド銀行の外にある銀行券¹⁾の変動は地金²⁾の額の変動に従うべきだという論拠を放棄されたものと理解してまちがいありませんか？——それを私が放棄するのは、こういうことのかぎりです……³⁾、つまり、いまでは、われわれがもっている情報によれば⁴⁾、イングランド銀行の外にある銀行券⁵⁾にさらにイングランド銀行の銀行業準備のなかにある銀行券をも加えなければならないというかぎりでのことです。」(6)これは大げさである。イングランド銀行は1400万・プラス・地金⁷⁾同額の紙《券》をつくりだす、という恣意的な規定は、もちろん、イングランド銀行のこの発券高を地金⁸⁾の変動につれて変動させる⁹⁾。しかしこの「情報」によって明らかに示されている¹⁰⁾ところでは、イングランド銀行がそのようにして印刷する¹¹⁾ことができる(そして発券部が銀行部に引き渡す¹²⁾)銀行券の量は、つまり地金¹³⁾の変動につれて生じる¹⁴⁾、イングランド銀行の二つの部¹⁵⁾のあいだでのこの流通は、同行の門外での¹⁶⁾流通高の変動を規定しないのだから、今では¹⁷⁾、あとのほうの流通高¹⁸⁾はどうでもよいものとなり、¹⁹⁾二つの部²⁰⁾のあいだのこの流通がまったく重要になる²¹⁾のであって、この流通と現実の流通との差が準備高に現われるのである。〔²²⁾それが²³⁾重要なのは、銀行法の結果として、²⁴⁾準備高が、〔イングランド〕銀行がその²⁵⁾最高発券限度にどこまで届いて²⁶⁾いるか、そして預金者たち²⁷⁾が銀行営業部²⁸⁾から²⁹⁾受け取ることができるのはどれだけか、を指し示すからでしかない。〕²²⁾〔〕

1) 「イングランド銀行の外にある銀行券」→「流通しているイングランド銀行券」

2) 「地金」→「金準備高」

3) 「……」——証言ではここに、「——このことが、放棄するということの意

味なのであれば、それは実際には、陳述を完全なものにするということでありまして、いかなる点から見ても放棄することではないのですが——」というオウヴェストンの弁解がはいっている。草稿ではこの部分は、「……」ではなくて「——」となっている。

- 4) 「いまでは、われわれがもっている情報によれば [now with the means of information which we possess]」→「われわれが今日承知しているところによれば [nach dem heutigen Stand unsrer Kenntnisse]」
- 5) 「イングランド銀行の外にある銀行券」→「流通している銀行券」
- 6) 「() —— 削除。」
- 7) 「1400万・プラス・地金と」→「その保有する金の額に1400万を加えたのと」
- 8) 「地金」→「金準備高」
- 9) 「変動させる」→「変動するということを必然的にする」
- 10) 「この「情報」によって明らかに示されている」→「われわれが今日承知しているところが明らかに示したところでは」
- 11) 「そのようにして印刷する」→「この規程に従って製造する」
- 12) 「引き渡す」überlassen→übertragen
- 13) 「地金」→「金準備高」
- 14) 「生じる」→「変動する」
- 15) 「部」bureaus→Abteilung
- 16) 「門外での [out of doors]」→「壁の外での」
- 17) 挿入——「銀行当局にとっては」
- 18) 挿入——「つまり現実の流通」
- 19) 挿入——「イングランド銀行の」
- 20) 「部」bureaus→Abteilung
- 21) 「流通がまったく重要に [all important] なる」→「流通だけが決定的に [allein entscheidend] なる」
- 22) 「{ } および { }」—— 削除。
- 23) 挿入——「外界にとって」
- 24) 「銀行法の結果として、」—— 削除。
- 25) 挿入——「法定」
- 26) 「届いて」→「近づいて」
- 27) 「預金者たち」→「顧客たち」
- 28) 「銀行営業部 [Banking Office]」→「銀行部 [banking department]」
- 29) 挿入——「まだ」

¹⁾第3944号。「なにをイングランド銀行の準備高と見ておられるのか、委員会にお教えくさいませんか？——発券部によって発行された銀行券のうち、イングランド銀行以外のどこにも存在しない額です。」

1) 以下の「第3944号」からの引用は、エンゲルス版では削除されている。

やつ¹⁾の下劣さと²⁾不誠実さについては、次のようなすばらしい例がある。

1) 「やつ [d. Kerl]」→「オウヴァストン」

2) 「下劣さと [d. Lumperei u.]」——削除。

第4243号。「あなたのお考えでは、資本の量は、この数年、割引率の変動に示されているようなぐあいに資本の価値を変動させるほどの程度で、月々変動するのですか？——資本の需要と供給との関係は、疑いもなく、短期間にも変動することがあります。……もし明日にもフランスが非常に大きな借款を受けたいという通知を公けにすれば、それは疑いもなく、すぐにこの国¹⁾で貨幣の価値に、すなわち資本の価値に²⁾、大きな変動を引き起こすでしょう。³⁾第4245号。もしフランスが、わが国は急速……⁴⁾3000万だけの商品を買付けたい、と発表すれば、これらの商品にたいする大きな需要が生じるでしょう。⁵⁾もっと学問的でもっと簡単な用語を使えば、資本⁶⁾にたいする大きな需要が生じるでしょう。⁷⁾第4246号。フランスがその借款で買いたいと思うであろう資本⁸⁾は一つの⁹⁾ものです。フランスがこの資本を買うために用いる貨幣¹⁰⁾はそれとは別の¹¹⁾ものです。価値が変わるのは貨幣なのですか、それともそうではないのですか？——われわれはまた前の問題を復習しているようですが、考えてみると、これはこの委員会室よりも学者の研究室によりふさわしいものです。」こうして彼はこそそと逃げ出すのである。¹²⁾¹³⁾

1) 「この国」→「イギリス」

- 2) 「貨幣の価値に、すなわち資本の価値に」——エンゲルス版でも強調されている。草稿では、このうち「すなわち [that is to say]」には二重の下線が引かれている。
- 3) エンゲルス版ではここで改行されている。
- 4) 「……」削除。
- 5) 「これらの商品にたいする大きな需要が生じるでしよう。」——削除。
- 6) 「資本」——エンゲルス版でも強調されている。
- 7) エンゲルス版ではここで改行されている。
- 8) 「資本」——エンゲルス版では強調されている。
- 9) 「一つの」——エンゲルス版では強調されている。
- 10) 「貨幣」——エンゲルス版では強調されている。
- 11) 「それとは別の」——エンゲルス版では強調されている。
- 12) 「こうして彼はこそこそと逃げ出すのである。[So sneaks er aus.]」→「こう言って彼は引きさがる、といっても、研究室にはないが。」
- 13) エンゲルス版では、ここに次の脚注がつけられている。——「資本の問題でのオウヴァストンの概念上の混乱についてさらに詳しくは、第33章の終わりで述べる。[F. エンゲルス]」

(1989年12月6日)

正 誤 表

『資本論』第3部第1稿について、(本誌第50巻第2号), 1982年。

132ページ下から6行目 「Circulationsprozeß」→「Circulationsproceß」

151ページ上から11行目 「第3節」→「第4節」

「貨幣取扱資本」の草稿について、(本誌第50巻第3・4号), 1983年。

281ページ下から2行目 「ヴィッセリング」→「フィッセリング」

282ページ下から10行目 「ヴィッセリング」→「フィッセリング」

286ページ上から2行目 「ヴィッセリング」→「フィッセリング」

287ページ上から9行目 「ヴィッセリング」→「フィッセリング」

「信用と架空資本」の草稿について(上)、(本誌第51巻第2号), 1983年。

70ページ下から5行目 「567」→「577」

「信用と架空資本」の草稿について(下)、(本誌第51巻第4号), 1984年。

22ページ下から5-4行目 「铸貨, 貨幣, 貨幣資本としての流通手段と利子

生み資本」→「铸貨としての流通手段, 貨幣, 貨幣資本, 利子生み資本」

「資本主義的生産における信用の役割」の草稿について、(本誌第52巻第3・4号), 1985年。

- 337ページ上から5行目 「Unternehmungsprojektors」→「Unternehmungsprojektors」
- 「利子生み資本」の草稿について、(本誌第56巻第3号), 1988年。
- 3ページ上から13行目 「と呼ぶ。」→「と呼ぶ。）」
- 19ページ上から14行目 「1984年版」→「1894年版」
- 「利子と企業者利得」の草稿について、(本誌第57巻第1号), 1989年。
- 69ページ下から8行目 「対応する「」)」→「対応する「く」」
- 102ページ上から8行目 「エンゲルル」→「エンゲルス」
- 「資本関係の外面化」の草稿について、(本誌第57巻第2号), 1989年。
- 64ページ上から1行目 「資本」→「商品」
- 93ページ下から1行目 「1988年」→「1989年」

(拙稿について誤植・誤記・誤訳をご指摘くださった皆様に、あらためてお礼を申し上げます。今後も、気づいた誤りは——とりわけ草稿部分についてのそれは——「正誤表」で訂正していきたいと考えておりますので、引き続きのご指摘をお願いいたします。)